
遥か彼方の時代より【改訂版】

ハノン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遙か彼方の時代より【改訂版】

【Nコード】

N5667R

【作者名】

ハノン

【あらすじ】

量子転送実験の失敗により、『恒星間移民船クレイドル号』へと飛ばされた主人公は、そこで一人の少女と出会う。管理人格を名乗る彼女の話によれば、そこは遙か未来の時代だと言うのだ。捨てられた船の中、彼は再び元の時代へと戻る為に、人類との合流を目指して動き出すが……

8月16日、全面改稿を行い再び投稿。再評価をよろしく願います

プロローグ（前書き）

初めて来られた方はようこそおいで下さいました。
お気に入り登録している方はお久しぶりです。

しがない物書きを気取っておりますハノンと申します。

本作品は、作者である私が文章の練習として投稿して行く作品です。

その為、設定や文章構成等に矛盾点が生じる事があり、またその時の気分によりまして予告なく文章の改変や改修を行う可能性があります。

また、あーでもないこーでもないと修正しつつの投稿になる為、更新速度も期待できません。

以上に留意してご覧くださいますようお願い申し上げます。

8月16日、久しぶりに纏まったお休みが頂けたため、投稿活動を一時的に再開しました。

書けない間も拙作については何度も読み返しておりまして、展開的に無理があった事や表現が拙い所など、お出しするには恥ずかしい所が散見された為、全体的な加筆とストーリー展開の手直しを行い、改定版として改めて投稿し直す事を勝手に決定しました。

一先ずはプロローグ部分から序章の間幕までを一度に更新します。
文章量は増えていますので、読み応えのある内容に仕上がっている
と思います。

大まかな展開についてはあまり、変わらないかもしれません。

この度は改訂と言う事で続きを気にされていた方には申し訳ありませんが、別の作品と思って楽しんで頂ければと思います。

ブローグ

これまで歩んできた25年にも及ぶ歳月のほぼ全ては、研究と言
う言葉と共にあった。

私が生を受けた時代は、人類が拡大を求めた末に迎えた崩壊と停
滞から、何とか立ち直り、少しずつ進歩する技術に支えられ復興の
道を歩み出した――、そう言う時代だった。

そんな時代の流れの中、後の世の姿を大いに変貌させる画期的な
技術が生まれ出でる。

時空間量子転移論。

その理論を大雑把に言ってしまうえば、物質を量子レベルに分解し、
それを別の場所に構築する事で、同じものを瞬時に別の場所へと移
動させる事が出来ると言う物だった。

私が生まれるよりも前に、両親によって世に送り出されたこの大
発見は、その内容の難解さと技術的実証が不可能だった事から、一
般人はおろか、研究者の間でも眉唾物として扱われた。

両親はこの技術がもたらす恩恵について説き、大々的な研究を願
ったが、未だに日々を生き残ることができかどうかと言う状況の
中で、実現するかも定かではない研究に、大々的に投資できるほど
の余裕を、人類は持っていなかった。

研究資金を得られぬ事が分かった二人は、他の研究成果によって
得られた私財を切り崩しながら研究を続けた。

私が生まれ研究室をおもちや箱と勘違いしながら育っている間も、両親のそんな状況は一向に良くなり、私は分厚い技術論文を絵本代わりに抱きかかえ、机に向かって唸る父や母の膝の上で眠る幼少期を過ごした。

やがて時が過ぎ、私が15歳を迎えたその日、両親は時空間量子転移論の実証に成功する。

人類が物質の量子化を観測した世界で初めての、瞬間であつた――。

その時、友人の家で誕生日の祝いを受けていた私は、彼らとの一時を忘れ、両親の映るテレビの画面を真剣な表情で見つめていた。

沢山のマイクとカメラが放つ途切れる事の無いフラッシュに囲まれて、涙を流しながらも自信に満ちた表情で受け答えをする両親の姿が、何故か尊い物に見えて、涙が止まらなかった事を今でも覚えている。

その日からの私には一つの目標が生まれた。それは、両親の様な研究者になる、と言う物だった。

首都にある高校に通う為、両親の下を離れていた私は、二人の後を追う様に勉学に励んだ。優秀であると評価されてか、数多くの大学からの勧誘を受けたが、私はそれらの全てを断り、卒業すると同時に両親の下へと戻ることにした。

私を出迎えてくれた両親は、誇らしげな顔で卒業を祝う。

小さな研究室が世界の全てだった思い出は過去となり、私が幼少期を過ごした田園風景に囲まれた小さな研究所は、最新の設備と優秀な人材が集まる広大な敷地に建てられた研究施設へと変貌していた。

私は研究所に一室を貰い、名の知れた科学者となっていた両親の下に集まる、沢山のひと々と話す事ができる恵まれた環境の中で、勉強に明け暮れ、両親や、その同僚達との議論に明け暮れた。

再び時は過ぎ、私が彼らの中で共に研究ができる様になる頃には、生物の転送実験は当たり前前の物として扱われていた。

昆虫や爬虫類、魚類や鳥類、果ては哺乳類までもが量子となって世界中を飛び回り、その対象として人間が話題に上るまで、その時間にはかからなかった。私は人体転送実験に自ら志願する事を表明し、研究に取り組む傍らで体力づくりに明け暮れながら、実験の日に備えていた。

そして、私が一介の研究者として学会にその名が認知される頃、25歳の秋――。澄渡る青空に紅葉が良く映える、そんな日に実験は行われた。

「体調は万全か？」

転送プログラムの最終確認を行う私に、父が声を掛けてきた。

白髪交じりの髪に、少し白い肌。とても偉大な研究を成し遂げ、世界に名を馳せた研究者には見えない。売れない作家や、気苦労の絶えないサラリーマンと言った方が違和感のない、くたびれた印象を周囲に与えている。

「装置の方は任せていたけど、データ上の不備は見られないし、問題ないと思うよ。父さん」

両親の研究を手伝う事ができると言う充足感を感じながら、私はパソコンに走るプログラムを目で追い掛ける。

「体調の事を聞いたんだが……。いいか、祐一？」

肩を掴まれて問いかけられた私は、視線を父へと向ける。

「今回の実験、お前を被験者に選んだ事を後悔している。自分の息子を私達の理想に付き合わせる事はないんじゃないかと、今でもそう考えているんだ……」

真剣な表情を浮かべながら内心を吐露する父の姿に、私は言葉を失い、視線を彷徨わせる。

「正直、お前には私達の様になって欲しくは無かった。何も知らず、普通に笑って無事で暮らしてさえいれば良いと考えていたんだ。…だが、お前は自ら選んでここに立っている——、何があっても、自分を強く持て。いいな？」

それだけ口にする、父は手を離して扉を潜り、部屋を後にする。

「父さん……」

刹那に浮かんだ私の思考は、プログラムの動作チェックが終了した事を告げる音によって遮られる。私は、気を取り直す様に立ちあがると手を上げてガラスの向こう側へと合図を送る。

その合図を待っていたかのように扉が開き、様々な計器や機材を手を持った同僚達が私へと群がって来る。

人の波に押される様に、部屋の中央に鎮座した椅子に腰を降ろした私は、まるで着せ替え人形のように、されるがまま、瞬く間に全身へ機械を貼りつけられ、コードが至る所から生える異様な姿となった。

全ての段取りが整い、同僚達が部屋から出て行く頃には、私は椅子から動くことすらできない鉄の塊の様な姿になっていた。

スピーカーからは、優しい声が聞こえてくる。母の声だ。

「祐一、聞きなさい。これは世界で初めての実験であると共に、私達が考えた理論を完成させる最後の一步でもあるわ。少なくとも父さんと私はそう信じてやってきた。今から、あなたがそれを証明するのよ」

頷く事も、喋る事も出来ない私は黙って母の言葉を聞く。

「父さんから聞いただろうから言わないけれど、一つだけ……しっかりやりなさい。いいわね」

流れる声は止まり、少し躊躇した様な沈黙が続く。それはまるで、別れを惜しむ様な長い沈黙であつた。

「よし、始めろ」

沈黙を断ち切る様な父の声がスピーカーから響き、部屋の中にこ

だます。

「量子転送実験開始」

「睡眠導入工程開始。脳波、心肺モニター異常なし」

スピーカーに流れた父の声と共に、部屋の中へと睡眠ガスが注入され、私の意識を落としかかる。画面を真剣な表情で睨みながら仕事をこなして行く同僚達の姿を脇に見ながら、私の瞳は徐々に光を失っていった。

やがて訪れた暗闇の中。私は小さな自分の姿を見た。

涙を流し、テレビを見つめ続ける小さな子供。その時に抱いた決意を反芻しながら、私は無限に広がる光帯へと飲み込まれて行った。

光の中、私の頬を暖かな風が撫でる。

それは、私の旅立ちを祝福するかのような、慈愛に満ちた物だった――。

第一話 流れ着いた先

宇宙空間。

人類が憧れと共に見上げ、夢と共に目指し、繁栄と希望を胸に飛び込んだ世界。

そんな星々が瞬く、無限の広がりを見せる暗い海を、一隻の船が進んでいた。

遠く彼方に消えた太陽は既に星々の中に紛れ、船外に灯る識別灯の点滅と、僅かな輝きを放つ無数の星だけがその船体を淡く照らし出している。大きく口を開けた船尾の噴射口に光は無く、浅い傷が無数に刻まれた色褪せた船体は、その船がこれまでどんな道程を歩んできたのかを、如実に物語っていた。

非常灯が点る船内は、静寂で満たされている。

無論、そこに音が無いわけではない。艦内を巡る空気を送り出している空調設備はその音を静かに響かせているし、その風を受けて葉を躍らせる観葉植物は、囁きにも似た音色を奏でている。

人の営みが失われてからどれだけの年月が過ぎ去ったのか、かつては人が行き交い喧騒で溢れていたであろう広い通路は閑散としており、所々に見える扉は主人を迎え入れる事を忘れ、錆びつき朽ち果てている。

色鮮やかな色彩で壁を賑わせていたポスターは風化して色褪せ、至る所に置かれた観葉植物はそのほとんどを茶色く染めて小さく頂

垂れていた。

そんな、閑散とした艦内の一角にその部屋はあった。部屋の名前を、量子転送中継室と言う。

室内には小さなコンソールが置かれ、正面上部には大画面のモニターが並んでいる。両脇には縦長の演算装置が隙間なく置かれており、この部屋で行われる作業に、高度な演算能力が必要となる事を示していた。

モニターの向こう側、ガラスに隔てられた部屋の中には、量子転送装置の本体と思しき物が鎮座していた。横倒しに寝かされた円筒形のベッドの様なその装置は、半透明のカプセルで覆われ、下部には至る所からコードや配管がその姿を覗かせている。

天井には半円状のアンテナの様な物が埋め込まれ、目立たぬようになっではいるが、壁にも無数の突起が配置されている。白を基調とした壁で覆われたその部屋は、小さな輝きを放つ室内灯によって青白く照らし出され、幻想的な光景を見せていた。

そんな部屋のコンソールの前に立つ人影があった。一見して幼さの抜けきっていない子供の様に見えるその人物は、手慣れた様子でコンソールを叩き始める。

——静かだった室内が、俄かに騒がしくなる。

警告を告げるアラームが響き、室外への退去を促すアナウンスが流れている。あらかじめ録音されていた物だろう。感情の籠らない、抑揚の無い声だった。

発電ユニットがその出力を上げ、室内を照らす非常灯がその色を赤く変化させて危険を告げる。半円状のアンテナからは目に見える程の電流が流れては壁に取り付けられた突起物に反射して、部屋全体を包み込む。

機能が制限されていたコンソールに光が灯り、徐々にその数を増やしていく。ホログラムによって浮かび上がったディスプレイには様々なグラフや数式が並び、勢い良くプログラムが走り始めると、演算装置はその巨体を低いうなり声で震わせ、積りに積もったほこりをふるい落としていく。

人影はそんな状況にも動じる事無く、表示される情報を眺めては、それに合わせる様にコンソールを叩き続ける。

しばらくすると、量子転送装置に変化が訪れた。

半透明のカプセルの中には、細かな光の粒子が寄り集まっている。

量子化された情報が可視状態となったそれは、徐々にその姿を大きくし、やがて寄り集まって人の形を作り出した。

カプセルに取り付けられたコードが小さな炸裂音と共に剥がれ落ちる。

人型を形成した光が一層まばゆく輝き、大きな音と共に部屋全体を包み込むと、行き場を失った電流がそこかしこでスパークしていた。

視界を覆わんばかりに広がった光の奔流はやがて収まり、部屋の中では帯電した空気が、バチバチと音を立てながら明滅を繰り返す。

ていた。

電子音と共に備え付けのハッチが開くと、帯電した空気は艦外へと放出され、部屋の空気は瞬時に失われる。

部屋が完全な真空状態となると、ハッチは音を立てて閉まり空気が送り込まれてきた。部屋が空気で満たされ、割れる様に開いた力プセルが、音を立てて床の隙間へと消えていく。

部屋を隔てていた扉のロックが外され、安全を告げるアナウンスが流れた時には、ただ、小さなベッドのみがそこに横たわっていた。ベッドには、一人の男の姿があった。

綿で織られたズボンを履き、上半身にはヒザまで伸びる白衣と、厚手のセーターを身に着けていた。中肉中背で高くも低くも無い身長長の男性は、整った品の良い顔立ちに、短く纏められた黒髪が、色白の肌と相まって、神秘的な印象を与えている。

その様子を見届けた人影は、窓に手を置き、しばしの間考える様な仕草をすると、踵を返して部屋を出る。

扉が閉まり、気配の消えた部屋に静寂が戻る。

照明の落ちた部屋の中。ベッドに横たわる男の寝息だけが、時の流れを刻み続けていた。

.....
.....
.....

……

夢を見ていた。

自分の過去が走馬灯の様に体を通り抜けては、淡い光を放ちながら暗闇へと浮かび上がる。

ふわふわと所在なく漂うその光は、暗闇を飛び交うホタルの様な穏やかさを持って、私を照らし出していた。

やがて、漂う光は徐々に渦を巻いて寄り集まると、一つの大きな塊となって目の前に現れる。

私は暖かな光に誘われる様にそれを掴もうと手を伸ばすが、塊は形を変え、暗闇の中へと溶ける様に消え始めた。

逃すまいと必死に手を伸ばした私は、その光の一端を掴む。

途端、眩い光が視界を照らし、私の意識を白く塗りつぶした。

——気が付くとそこは暗闇だった。

耳には規則正しいリズムを刻む微かな音が聞こえ、背には体を包み込む柔らかな感触が伝わってくる。

瞼が重い。まるで泥の中に沈み込んで抜け出せなくなったかの様な、強い抵抗と疲労感が体を蝕んでいた。

「バイタルログに変化を確認。お目覚めですか？」

馴染みの深い母国の言葉が、おぼろげな意識の中で妙にはつきりと耳に届いた。

優しい響きを持ったその声に私は、ゆっくりと瞼を開く。

薄明かりに照らされた青白く、幻想的な世界には、白い天井と星々の広がる小さな窓。

そして、——窓を背に佇む、一人の少女の姿が在った。

歳の頃は十代の半ば位だろうか、慎ましく膨らんだ胸と、肩で揃えられた薄い色の黒髪をした稚い顔立ちの少女だったが、感情を排した表情でこちらを見つめるその姿は、何処か大人びた、落ち着いた雰囲気を感じさせていた。

「……ここは？ 君は一体………っ!？」

私は少女に疑問を投げかけながら、体を起こそうと力を込める。

しかし、体を半分ほど持ち上げた所で、突如体に鋭い痛みが走る。声は途切れ、言葉にならない吐息が口からこぼれ出た。

その様子をどう思っただのか、私に向かって歩みを進めながら少女は口を開く。

「貴方の転送ログから情報の劣化を確認しています。遠い場所から転送されてきたのでしよう、内臓にこそ影響は無いものの、全身の筋繊維がいたる所で寸断されていました」

そこまで言った彼女が腕をかざすと、何もない空間に光を放つ薄

い板の様な物が浮かび上がる。

それは、とてつもなく精巧に作られたホログラムだった。どのような仕組みでそうなっているのかは分からないが、彼女が腕に巻いた小型端末から放たれる光の帯によってそれは出来ていた。

そこには人を模ったシルエットが浮かび、所々に赤い表示が打たれている。全身の至る所に打たれた赤い点と、薄く見える私の顔写真から、それが私のカルテの様な物で、赤い点は損傷部位を示している物だと言う事が読み取れた。

「貴方のデータと、過去の事例を見れば、貴方は典型的な転送事故に巻き込まれたと言えます。現在、医療用ナノマシンの投与により状況は落ち着いています。しばらくは体を動かさない方がよろしいでしょう。混ざり物の無い体であった事が幸いしました。直に現在の症状は改善されます」

表情を変えず、淡々とした口調で話す少女。

彼女が私に語るこの状況に対する説明。それは私にとって馴染みの深い、時空間量子転移論を基にしている事が分かった。

彼女の口調も、当たり前前の事を当然の様に告げる、確信に満ちた物だった。

しかし、だからこそ私は彼女の言葉の意味を計りかねた。

彼女が先程私に告げた転送事故と言う言葉。

——それは、私達研究者が遙か未来の時代で起き得る、としてい

た事象だったからであつた。

転送事故。

それは、量子転送時の移動距離が一定を超えた際に起きる、情報の欠損事故である。

私達は数百光年の距離を移動する事で情報欠損が発生すると言う予測を出しているが、その様な長大な距離を勢力下に置くことなど、現代の技術力では、到底不可能な事であつた。

にも関わらず……、彼女は私にその可能性を提示する。確信を持った口調と、揺らがぬ瞳をもつて。

「……分かつた、君の言う話を信じる事にするよ」

ジッと値踏みをするかの様に私を見つめる少女の視線に、肩を竦めながらそう返した。

「信じて頂けたようで何よりです」

言葉とは裏腹に、表情を変えない彼女の様子が気に掛かりながらも、私は現状についての情報を集める事にした。

周囲を見渡す限り、この部屋に用いられている技術は現代の物と見た目の違いは無い。だが窓の外に見える星空がその認識は誤っているのだと言う事を伝えてくる。気密性の高い部屋に、幾重にも安全装置が組み込まれた扉。少女が床を蹴る足取りは軽い。

「ここは……、地球じゃないんだな……」

やはり信じられないと言う思いが強いのか、乾いた笑いと共に口からこぼれた言葉は探りを入れる様な、慎重極まりない物だった。

一体どうしてこうなってしまったのか。

実験が失敗し、消滅してしまう事こそ覚悟していたが、何も分からぬまま、得体の知れない所に放り出されると言う事は想像の埒外であった。……いや、もしかすると消滅に対する覚悟もまた、無自覚だからこそだったのかもしれない。

「どうかなさいましたか？」

しばらくの間、思考を遊ばせていた私は、その言葉によって現実へと引き戻された。

先程、会話が途絶えてから、考える事に忙しく、彼女の事を忘れていたらしい。

「いや、すまない。少し考え事をね……………そうだ、君の名前を聞かせてくれないか？　いつまでも君だところちも落ち着かなくてね」

「失礼しました。しかし、私には名前がありません。強いて挙げるのであれば型式番号が私の名前とでも申せましょうか」

抑揚の薄い声が告げる。

名前が無いと言うのはどういう事だろうか？

型式番号などと言うのだから人工的に生み出された存在だろうか、

ロボットにしては人間味がありすぎる。

……思考を持ち、自ら判断を下す造られた存在。

「君は……管理人格かい？」

それ以外には思いつかなかった。そんな私の質問に、彼女は淡々と答える。

「ご明察です。私は第43開拓移民船団所属する中型移民船、クレイドル号の管理人格です」

無表情ながらも、どこことなく誇らしげな響きを含んだ声が耳に届く。それは、彼女が造られた存在であると言う事を忘れさせる、意思ある言葉だった。

管理人格。

それは別名を船舶管理人格と言い、煩雑化の一途を辿る宇宙船の業務を統括管理し、有人作業の軽減を図る目的で導入される疑似人格プログラムの事であった。

通常は船舶の航行補助や設備維持、運営補佐等を行うが、管理権限の委譲によって船内における全ての業務を統括管理して運用する事ができる為、船舶運用のある局面において、人類は最終的な意思決定と方針の提示を行うだけで事足りる様になっていた。

しかし、管理人格に体は無く、音声のみで受け答えをしていると聞いていたが、いつの間に体を持つに至ったのだろうか。

いくら考えてみても答えは出ない。現実には彼女が居る以上、どうやら私の聞いた噂は間違っていたようである。少なくとも、目の前の少女が映像などとは到底思えない。

「分かった。しかし名前が無いと言うのも……以前に呼ばれていたとか、そう言う事は？」

「名前に該当する識別信号は登録されていません」

どうやら、この責任者達は彼女に名前を付けて居ない様だ。いつ命を落としてもおかしく無い宇宙の航海では、船の象徴ともされる管理人格に名前を与えと言う行為は、良く耳にする美談の一つだったのだが……

「そうだな……ここはひとつ、クレイドルの名前から取って、クレイって言うのはどうだろう？」

ふと思いつきで言葉にしてみた物の、私はすぐにそれを思い直した。流石に人の形をした最先端と思しき船舶管理人格に、“粘土細工”は無いだろう。自らの叩いた軽い言葉に、苦笑を浮かべながら声を上げようとしたが、彼女によってそれは遮られた。

「識別信号を確認……クレイ……登録完了。お名前を頂戴いたします。ありがとうございます。マスター」

今までの無表情が嘘であったかのような、照れた笑顔を顔に浮かべた少女。

「マスター……？」

彼女の表情とその言葉に、私は間拔けな声を上げた。どうやら思いつきで口走った名前は正式に登録され、私はそのせいか、彼女のマスターとして落ち着く事になったらしい。クレイと言う名前となった少女は、その響きを楽しむように目を細め、年相応のはにかなだ笑顔を浮かべている。

「待ってくれ、私がマスターだって!? この船の責任者は？」

確かに、今この場に人の姿は無い。しかし、誰も乗っていない言う事はないはずだ。そう思った私は、クレイに向かって疑問を投げかけた。

私の知る限り、移民船には数千人からなる人々が乗り込んでいる。その規模になれば、船員の数もかなりの物だろう。もちろん、その中には上級船員として扱われる航海長や艦長などが名を連ねている。そんな彼らを差し置いて、ごく一般的な研究者である私が、管理人格の主人、すなわち艦長になどなれるはずが無い。

そんな私の疑問に、彼女は答える。

「この船は現在放棄されており、明確な指揮系統が存在していません。管理人格である私、クレイは、この船唯一の人類であるマスターを、本船の最上級指揮者として位置付けました」

未だ混乱の中にある私の顔をじっと見つめるクレイ。

先程までの無表情とは違う、感情の籠った瞳で私を見つめるクレイの表情に、私の脳裏には拒絶の言葉どころか、質問の言葉すらも浮かんでこなかった。

「……………」

「分かった、分かったよ。だからそう見つめないでくれないか。それから、そのマスターとやらはやめてくれ、私にもちゃんとした名前があるんだから」

睨みあつて数十秒、根負けした私は、両手を上げながらこの処遇を甘んじて受ける事にした。

「了解しました。ではお名前をお聞かせ下さい。まだマスターは正式に名乗られていません」

混乱の中で、私は名前を告げる事を忘れていたらしい。

何とも決まりの悪くなった私は、頭を掻きながらクレイに告げる。

「すまなかった。私は桂木祐一。一介の研究員をしている」

「識別信号……桂木祐一……登録完了。ようこそ、マスター。クレイドルは、貴方を歓迎いたします」

「……だから、そのマスターを辞めると言つのに……」

クレイが告げる歓迎の言葉を耳に、軽い溜息をこぼした私は、この船、恒星間移民船クレイドル号の最初のクルーとなったのだった。

第二話 救援要請

船員として船のデータバンクへ登録を済ませた私は、クレイに薦められるままに簡易の上級船員教育を受けた。

ベッドから起き上がることもできない私は、艦内設備の説明や艦長の通常業務、果てはこの状態では全くの無意味であろう、休暇の申請方法に至るまでを映像教育と言う形で叩きこまれることになった。

そして現在、私はベッドの上で横になりながら、クレイの話を聞いている。

遠くに見える恒星から降り注ぐ光が、小さな窓から差し込んでくる。同じ様に光の当たった緑に覆われた惑星もまた、光を反射してキラキラと輝いていた。

クレイが管理する恒星間移民船クレイドル号は、人類が43回目の銀河開拓に送り出した船団に所属する、一隻の船だった。

彼女がここに到達する数百年前、当時の人類は未だ地球型惑星を発見できず、資源惑星にテラフォーミングを試みながら自らの生活圏を拡大させていた。

しかし、ついに人類にとって第二の故郷になりうる、この、トレイズ星系が発見されたのである。

新たな土地、新たな資源、そして、新たな生命――。

人類の夢と希望を一身に背負いながら、クレイ達開拓船団は旅立った。人類の生活圏を抜け出し、未知の事象が広がる宇宙空間を彼女達は進み続けた。

しかし、順風満帆といえた航海も、未踏宙域を進むにつれて陰りが見え始めた。長い道程の中で、少なく無い数の船が脱落していたのだ。

クレイドル号もまた、度重なる機関の不調により放棄された船の一隻だった。廃船処理が行われ、乗組員や乗客が去り、宇宙を漂う鉄の塊となってしまうたクレイドル号だったが、辛うじて機能していた航行プログラムに従い、慣性航行と惑星を利用した重力加速によって目的地を目指した。

それから数百年——彼女はついに目的地にたどり着く。そして、人類がこの場所に存在している事を証明するかのように、量子転送装置は起動した。

しかし、現れた者はこの時代の者などではなく——

「……私だったと？」

私は、クレイに確認の意味も込めた疑問を投げかける。

船を取り巻く状況について、数時間の問答を繰り返した私の言葉は、既に砕けた物になっていた。

「はい、マスター」

「何でまたそんな事に……」

「分かりかねます」

確かめる様に尋ねる私に、ごく短い返答を、クレイは返す。

名前を付ける事になってしまった時に見せた、はにかんだ顔は既になりを潜め、能面の様な表情でこちらを見つめる彼女からは、一切の感情が消え失せていた。これが普段の彼女の表情である事は短い時間の中で既に分かっていたが、無感情に見つめられていると、何か彼女を怒らせてしまった様に思えてしまう。

「どうかなさいましたか？ マスター」

そんな事を考え、沈黙していた私をどう思ったのか、クレイが尋ねてきた。

「いや……少し、な」

言葉を濁す私に興味を失ったのか、はたまた心情を察して口を閉ざしたのか、思考の読めない顔のままに、静かな佇まいでクレイは控える。

「はあ……」

そんな彼女の姿に小さな溜息を落とした私は、気づかれぬように思考の海へと潜っていったのだった。

クレイから聞いた話は、大半が彼女の周囲で起きた出来事であった。と言うのも、クレイの覚えている事がそれしかなかったからである。

曰く、廃船処理の影響で船のデータベースが消去されている事に起因した情報の不足であると言うが、少しでも現状を把握しておきたい私からすると、面白くない事態である。

それでも、分かった事実を総合して見れば、多少の推測はできた。人類は既にこの宙域に到達しており、付近一帯を勢力下に治めているで”あろう”と言う事。そして、私達が現在陥っている状況から言って、彼らとの接触が必須になることであつた。

落ち着いて考えてみると、今の状況は良い物ではない。衣食住と言った最低限の物は残されているが、このままでは宇宙を放浪した状態で寿命を迎えてもおかしくはない。いや、それ以上に寿命を全うできない可能性の方が高いのだ。

ここは、不審者としてどこかに連行されるとしても、人類勢力との合流を考えた方が建設的だろう。それに研究者、特に量子転送関連の研究者や技術者と会うことができれば、この時代に迷い込んだ原因を突き止め、あわよくば元の時代へと帰還する可能性も見えてくる。研究者達にしてみても、過去からの旅人と言う事になれば良いサンプルとなるはず、少なくともそう見せておけば命までは奪われないだろう。

そう考えた私は、早速彼らと合流する為の第一歩を踏み出した。

「クレイ」

すぐ傍のクレイを呼ぶ。壁の置物の如く微動だにしないまま、私の傍に控えていた彼女は、その声と共に視線をこちらに向けた。

「何か御用でしょうか？」

「この付近に人類が拠点とする場所はあるだろうか？」

私の質問を受けたクレイは、ゆっくりと横に首を振って答えた。

「現在、この宙域上において、通信波に類する信号は観測されてお
りません」

通信波が観測されていない……それは情報の交換が行われていない
と言うことである。私から見ても信じられない程の技術を持った
人類がその活動を行おうとすれば、大なり小なり情報のやり取りは
必須となつて来る。それがまったくないと言う事は……

「……拠点が無いのか？」

「そう考えて頂く他にありません」

呟いた言葉にクレイが反応を示す。

その言葉を受けて思い浮かんだ漠然とした不安に首を振る。人類
の勢力圏内にあつてもおかしくない場所で、それらしい活動が見ら
れない。私は考えていた推測と違う現状の薄気味悪さに、嫌な汗が
背中を伝う感覚を覚えた。

「こちらからの通信は可能なのか？」

「短波通信は一定間隔で行っておりますが、未だ返答はありません。
星系外への長距離通信に関しては送信のみ、可能となっております。
実行しますか？」

短波通信に応答が無いのは宙域内に拠点がないのであるから不自然なことではないだろう。そうすると、合流の可能性が残るのは長距離通信での救難信号の発信のみとなる。

「早速頼む」

クレイの提案を即座に承認する。このまま彼らの拠点を探す事も考えては見たが、場所が分からない上に、この近辺に居るのかすら怪しくなった今ではこれ以外に方法が無い。

「了解しました。近隣の全宙域帯へ向けて通信を行います。通信種別は如何致しますか？」

クレイは、手元に表示させたディスプレイをこちらに展開させる。そこには、各通信による交信可能範囲を示す円周状のマップとその距離を示す文字データが表示されていた。もっとも、データベースが失われた今、近隣の星系マップは真っ黒に塗りつぶされているが。

私は少し迷いながら、表示された一覧から一番通信範囲が広い超光速通信を選んだ。専用の設備を必要とする事と、時間が掛かる事が難点ではあるが、出し惜しみをする必要はないだろう。

「了解しました。通信を開始します」

そう言ったクレイは、手元に表示されたディスプレイを操作し始める。流れる様に動く指が画面を叩く度に、一定のリズムを刻んでいた船の駆動音が変化する。

「前部姿勢制御スラスタ噴射」

クレイの言葉と共に、小さな振動が前方から響いてくる。窓から見た小さな岩石の動きは次第にゆっくりとした物になり、やがては船を追い抜く様にその向きを変えた。

「船体の停止を確認。ガイドビーコン射出、超光通信アレイ展開します」

小さな射出音が耳に届く。その後を追う様に、何かが開く様な音と地響きにも似た振動が体を揺さぶった。クレイの言葉にあった超光通信アレイという物が展開されているのだろう。姿こそ見えないが、長く続くその振動が、展開されている設備の巨大さを物語っている。

「展開完了を確認。データリンク正常。情報入力開始」

ふとクレイを見ると、手元に表示されたディスプレイの映す映像が切り替わっていた。そこには大きく伸ばされた腕の様な物と、小さく点滅するカプセルにも似た物体が映し出されていた。あれがビーコンなのだろう。

腕から放たれた光がビーコンに当たる。

すると、ビーコンは卵の殻を破る様に、内側から開き、太陽光発電ユニットと思しき翼を広げ、小さく回転を始めた。

「入力完了、ビーコン起動準備開始」

展開が続く間も、クレイの声は止まらない。小さく回転し始めたビーコンは、その中央よりアンテナの様な物が無数に伸び、内蔵さ

れたスラスターから炎が上がっては、向きを縦横に変えて行く。

「ビーコン起動」

クレイのその言葉と共に、腕の様な物から眩い光が放たれる。

ビーコンへと向けて放たれたその光はビーコンへ吸い込まれ、突き出したアンテナを介して周囲へと拡散する。

光が消え、腕の様な物はゆっくりと折れ曲がり船の影に隠れた。クレイの手元に映る映像には、不規則な点滅を繰り返す、小さなビーコンのみが残されていた。

「マスター、ビーコンの起動と動作チェックを完了しました。ビーコンは現在正常に稼働中。以後は救難信号と位置情報を近隣の全宇宙帯に向けて発信し続けます」

「ああ、ありがとう。お疲れ様」

「……いえ、お気になさらずに」

クレイを労う私の言葉に、少し詰まった様子を見せた彼女だったが、気を取り直したように短い返答を返す。

「……さて、後は暇な時間を楽しむでしょうか」

救難信号の発信は終わった。後は来るか分からない救援を待ちながら悠々自適の生活と洒落こもつか、そんな冗談の様な事を考えながらベッドに深く体を沈める。

「はい、マスター。……何か、飲み物をお持ちしましょう」

天井を向いた首を動かし、背を向けた彼女を窺い見る。私がこんな冗談を言えているのも、彼女のおかげと言えるだろう。

彼女は混乱していた私の問いかけに、淡々と答えてくれた。まるで何の問題も無いと言わんばかりに。

本当に何の事は無かったのかもしれない。ただ、彼女がここにいないればどうなっただろう？ 私の脳裏に孤独のままに宇宙を彷徨う自分の姿が思い描かれる。

——酷く嫌な想像に、私は首を振る。

扉の閉まる音。

彼女が去り、静寂の中に響く船の駆動音を聞きながら、やはり私は、彼女の存在に救われたのだと、改めてそう思うのだった——。

第三話 過去との邂逅

「暇な時間にも飽きたな……」

そうこぼした私の声に、クレイは手に持ったティーカップをテーブルに置いた。上質な陶器の器は鈴が響く様な綺麗な音色を奏で、カップの中に注がれた液体が静かに揺れていた。

中を満たしていたのはクレイが入れた紅茶だった。横には空になったトレーが置かれている。トレーの上には同じくクレイの用意したクッキーが積まれていたが、今ではその残骸が残るばかりである。

救難信号の発信を行ってから数時間。椅子の様に形を変えたベッドの上に、腰を降ろしたままの私は暇な時間を持て余していた。

始めはクレイの持ってきたクッキーと紅茶の意外な美味しさに、のんびりとくつろいでいたのだが、流石に胃袋の全てが紅茶とクッキーで満たされるに至っては、この状態を持て余してしまっていた。

「ご希望でしたら、船内をご案内いたしますが」

私の独り言に反応したクレイが、冷めてしまった紅茶を捨て、再びカップへと紅茶を注ぎながら答える。

もう紅茶は良いのだが……、何杯でも飲めると褒めたせいだろうか？ 心なしか嬉しそうな表情で紅茶を注ぐクレイの姿に、断るタイミングを逸した私は、以降出されるままに紅茶を飲み続けている。

「……是非頼みたいんだが、動いても大丈夫なのか？」

私は転送事故の影響で歩く事もままならない状態であった。医療用ナノマシンが体内から治療を施しているらしいが、イマイチ効果のほどは分からない。現に先程紅茶に手を伸ばそうとした時は、随分と痛い思いをすることになり、おかげで彼女に甲斐甲斐しくティータイムの世話をさせてしまう事になったのだ。

治療が済んでいるかなど、再び体を動かせば分かるのだろうが、身を引き裂かれる痛みなど、そう何度も味わいたくは無い物である。

「問題ありません。既に治療は完了しています」

腕の端末から浮かび上がった、カルテを見ながらそう言ったクレイの言葉を受けた私は、訝しく思いながらも、ゆっくりと、慎重に腕を持ち上げる。

はじめに動かした時の様に強烈な痛みが走る事も無く、腕はいつもどおりに動いた。その様子を確かめた私は、意を決してベッドから抜けだそうと体を捻る。

やはり痛みは無い。

医療用ナノマシンがもたらす効果に驚きを覚えつつ、私は両足で立ち上がった。寝たきりだったのが嘘の様に体が軽い。疑似重力に引かれて床へと垂れる、着古した白衣が与えてくれる重みが懐しかった。

「凄い物だな……あの傷をこの短時間でとは……」

「幸いにも筋繊維の断裂のみでしたので、それほど時間は掛かりま

せんでした」

内蔵にダメージがあればこうは行かなかった様だ。彼女が言うには、盛んに行われていた人体の機械化や有機細胞の移植、遺伝子操作が施されていなかった事も、その一因だと言う。

私は、そこまで進んだ技術の一端に少し驚きながら、確かめる様に体を触る。今の自分の体が、自分の物で無い様な、そんな錯覚を覚えたからだ。

「どうかなさいましたか？」

「いや、なんでもない。それより、船の案内を頼む」

ぺたぺたと自らの体を調べる様に触る私の様子を訝しく思ったのか、クレイが尋ねてくる。私は大した事は無いと、首を横に振ってクレイを促した。

「了解しました。マスター」

そんな私に、少しの疑問も懐いた様子を見せず、ディスプレイを閉じたクレイは席を立つ。

私は彼女が入れた紅茶を一息に飲み干すと、紅茶とクッキーで満たされた腹を抱えながら、彼女の後に続くのだった。

.....

.....

.....

「こちらです」

クレイに伴われた私は、くすんだ光を放つ通路を歩く。

一定間隔で継ぎ目の刻まれた銀色の廊下には、発光パネルが取り付けられ、壁や床自体が薄く光っている。

所々に設けられた扉の前にはセキュリティレベルを示す二本のラインが描かれており、通る者を堅く制限している様だ。最も、艦長として登録されてしまっている私には意味の無いセキュリティではあるが……

クレイが端末をかざして扉を開き、先へ進む。

地球の標準重力より少し重く設定された疑似重力のおかげか、体に掛かる重さに違和感が残る。

無重力下での活動が多い宇宙生活において、一定の体力を保つ為に設定されていると言うが、慣れるまでは苦勞しそうである。

「それにしても、広いな」

少し息を乱しながら私は一人、愚痴をこぼす。

彼女と共に部屋——量子転送中継室と言っらしい——を出てから15分程だろうか、私達は幾つもの階段やエレベータを経て終わりの見えない廊下をただ歩いていた。

「お疲れですか？」

私の様子を見たクレイが立ち止まり、振り返りながら声を掛けてくる。

「疲れてはいないが、こつも広いとな……移動手段は無いのか？」

「ブロック間の移動には艦を横断するトラムリフトが用いられています。ブロック内の移動手段もあるにはありますが、ここ研究ブロックは機材の移動が頻繁に行われる為、重力区画指定がなされていますので、歩いて頂くしかありません。もうしばらくご辛抱下さい」

「いや、歩くのには慣れてるから良いんだが……」

「では、まずはここを抜けましょう。もうすぐ到着いたします」

そう言って再び歩き出すクレイ。

もうすぐと言う言葉の通り、歩き出してすぐに、特徴的な広い空間に出た。

待合室が設けられたプラットフォームにも似たその場所は、ある所を境に断崖の様になっており、その先には暗闇が広がっている。風による残響音が響く所を見ると、かなりの長さで広さがあるのだろう。天蓋部には2本のレールが走っており、その周辺を僅かばかりの照明が照らしていた。

クレイの話にあったトラムリフトの発着場——トラムステーションである。

「しばらくお待ちください」

そう言っ て私に断りながら、クレイは待合室に設けられたコンソールを操作する。数十人は収容できるのであるう待合室には私とクレイの二人だけが立っている。

会話は無い。

ただ照明が作り出す二筋の影だけが、私達がそこに居る事を伝えていた。

コンソールを叩く音が止まり、しばらく経つと、僅かな振動と共に甲高い音が響いて来た。待合室の外に先程まで広がって居た暗闇は既に無く、煌々と輝く照明がシャフト内を照らし出していた。

プラットフォームに出た私の頬を風が撫でる。生温かい感触を肌を感じていると、狭いシャフトから広い空間に出た為だろう、轟音を響かせトラムリフトが姿を現した。

わずかに10数メートル程の距離しか設けられていないプラットフォームの端に、その姿を見せたトラムリフトは急激に速度を落とし、数メートルの距離を進んで私の前にとまる。それは先程の轟音を響かせた様子とは違う、僅かの音も出さない粛々とした物だった。

>>トラムリフトをご利用いただき、ありがとうございます。商品企画センターではモニターの公募を――<<

到着を告げるアナウンスと共に扉が開く、既に利用する者の居なくなった設備の紹介や告知を聞きながら、私とクレイはリフトへと乗り込んだ。

私達が乗り込むと、扉が閉まり隔壁がロックされる。

リフトは滑る様に動きだし、駆動音は速度を増すごとに甲高く響き、風を切る音が遮蔽ガラスの向こうでくぐもった悲鳴を上げていた。

時間にして数十秒だっただろうか、トラムリフトが徐々に速度を落とし始めた。先程の急減速は無人だからこそできた事か。流石にこの速度から数秒で停止する程の急減速に人間の体は耐えられないだろう。

扉が開く。

隙間から差し込む光と、僅かな熱気を含む風。

鼻に届く油や金属が混ざった様な、何とも言えない不快な臭いに私は知らず顔をしかめた。

「鉱工業ブロックに到着しました。ここは小惑星より岩石や氷塊を採取し、各種資源として精錬、製品の生産を行う区画となっています。機関ブロックのすぐ横に設けられている為——」

そう言って到着した場所の説明を行うクレイの後に続きながら、私は同じ船内にあって、こつも雰囲気の異なる場所が出来上がることに、不思議な感覚を懷きつつ、鉱工業ブロックへと足を踏み入れたのだった。

.....
.....
.....

……

アステロイドを削岩する掘削機や、無重力下で岩石を融解させる宙空融解炉など、普段ならば知る機会すら持たない機械について説明を受けた私は、鉱工業ブロックを後にして、その足を居住区へと向ける。そこには住民が暮らす部屋の他に、日常生活を彩る様々な設備が整えられていた。

中でも私を驚かせたのは、数百メートルに渡って流れる小川と、それに併設される様に造られた公園の姿だった。

公園は家畜の放牧地も兼ねているのか、所々に設けられた草地の上で動物達が草を食んでいる姿が見受けられる。スクリーンパネルに映し出された青空と、壁に施された擬装によって、違和感なく仕上げられたその空間は、失われつつある地球の牧歌的な風景を見事に再現していた。

「クレイ、人がいるぞ？」

公園の中には、複数の影があった。それぞれが船の制服であろう白を基調とした装束に身を包んでいる。手にはクレイと同じような形の端末を付けている事から、この船の乗組員の者だろうか。

「いえ、人ではありません。彼らは私と同じバイオロイドです。最も、今マスターをご覧になっっている者達は単機能型と呼ばれる一般的なタイプですが」

その言葉を受け、この船が放棄された船である事を思い出した私は、家畜の世話を行う彼らを眺める。

遠目からは判別できない程に人に酷似した存在——バイオロイド。

有機人工知性体と呼称される彼らは、人間によって生み出された人ならざる者であった。彼女曰く、その存在は様々な分野、世代に認知されており、日常を支えるパートナーとして愛される者がある一方、臓器の培養ポットとして五感を廃され生ける人形となる者もあるという。

その中であってクレイに代表される管理人格型。すなわち万能型バイオロイドの素体を持ち、感情や自己学習機能を有する高度AI搭載型の個体は主に星間飛行を行う大規模船舶や政府関係、軍、企業等で用いられる事が多く、一般家庭に置いては殆ど目にする事は無いのだとか。

「そうか……」

淡々と話す彼女の言葉の一端に含まれる闇を知り、口からは何も言えない声が出た。

臓器を生み出す為だけに造られた存在と、それを許容する倫理観を内包した時代。バイオロイド達に馴染みが無いからだろうか。話を聞いた私はこの時代の人類に一抹の不安を懐く。

「どうかなさいましたか？ マスター」

不意に黙り込んだ私の様子を気遣ってか、クレイが静かな口調で問いかけてくる。

先程までの淡々とした物ではない、感情の籠められた言葉に若干の戸惑いを覚えつつ、私は口を開く。

「いや……、そうだな、あー……クレイは……」

逡巡しながら話しかけた私の言葉を、端末から響く通信音が遮った。

「失礼します」

そう断って、クレイは端末のボタンを押し、何事かを話し始める。手元には――何かの資料の様だ。映像を伴ったデータが表示されている。

私は、彼女が自分たちの境遇をどう思っているのか、それを知る機会を逸した事を残念に思いながらも、心のどこかで安堵している事に気が付いた。

やがて通信が終わったのか、クレイがこちらを向き直る。

「申し訳ありません。マスターの判断を必要とする案件が発生しました。指揮所への移動をお願いしたいのですが、よろしいですか？」

「うん？ いや、分かった。案内を頼む」

「分かりました。こちらです」

何か起きた様だ。感情が見えない所は変わらないが、クレイの顔からはどこことなく緊迫した様子が窺える。

そんな様子のクレイに促されるまま、私は公園を抜け、居住ブロックのトラムステーションへと戻り、滑り込むように到着したトラ

ムリフトへと飛び乗った。

少し乱れた息を整えるうちに、駆動音を響かせてトラムリフトが動きだす。

やがて、動きを止めたリフトから降りた私達の眼前に現れたのは、これまで見た物とは趣の異なる頑丈な作りの扉であった。

開閉を制御する接触式のホログラムに覆われた堅牢な扉、幾重にもロック機構を備えた造りをしている所を見ると、相当な備えが求められていたことが分かる。

クレイが手をかざし、開閉制御ホログラムを作動させると、ホログラムの輝きが消え機械音を響かせながら、扉の固定が解かれ始める。

大仰な音を立てて固定具が外れ、中央の円盤が回転しては、幾重にも折り重なった鉄の格子を、壁の中へと押しやっていく。

やがて、全ての格子が壁の中へと消え、最後に残された円盤が左右に割れる様に開くと、私達の眼前には向こう側へと続く道が姿を現した。

「この先が指揮所となっています」

その言葉と共に、クレイは再び歩き出す。

遅れぬ様にと、クレイに続いて通路を抜けた私を、見た事の無い風景が出迎えてくれた。

遠くに見える赤い恒星とその光に照らされた緑の惑星。雲をまとう山々や深い森、そして蒼い海が、陽に照らされてキラキラと輝いている。

視線を転じると、惑星を取り巻く岩石の帯が目に入る。大小入り乱れた岩石の円環は、黄金色に輝く平原の如く目の前を覆い尽くしていた。窓の外を漂う無数の岩石が、時折窓に接近するが、その度に緑の膜の様な物に阻まれ、弾き飛ばされている。

そんな、言葉を失いそうな風景を眼前に少ない数の――船内ではまったく言っていないほど見なかったが――バイオロイド達が忙しなく動き回っていた。

コンソールに表示された情報を処理し、艦内外に存在する設備の稼働状況を管理、調整する仕事を与えられた彼らは、ただ黙々と作業に従事している。

私達は一段高く、四角く区切られた指揮所から、そんな彼らを見降ろしていた。

「マスター、こちらにどうぞ」

「ああ、ありがとう」

眼下で行われるバイオロイド達の作業を見ていた私に、クレイが椅子を薦めてくる。それは一際大きなコンソールに備え付けられた、造りの良い椅子だった。

いつの間に用意したのか、コンソールの脇にあるテーブルにはコーヒーと軽食が用意されている。

ふと、覚えた空腹感に視線を落とす。視線の先――地球から共に旅をしてきた腕時計の文字盤に落ちる影は、正午に差し掛かろうとしていた。

.....

.....

.....

.....

「それでは、状況の説明をさせていただきます」

軽食を口に運ぶ私に、そう言っただけでクレイは説明を始めた。

今から凡そ1時間程前、船のレーダーが中規模のデブリ群を捉えた。

これは時折ある事で、岩石の破片や氷塊であることが殆どの為、資源の採取先として度々利用してきたと言う。

今回も先の例に則って資源の採取を行おうと、広域スキャンによるデブリの調査、解析を行ったらしい。

その結果が――

「微弱な信号？ 間違い無いのか」

「はい、出力が低い為か内容は分かりませんが、船の解析プログラムは人工的な構造物から放たれた物である可能性が高いと――、そう結論を述べています」

「ふむ……」

「いかがいたしますか？」

信号を送り続ける何かが、近くを漂っている。それもデブリとして。

確かに、あらかじめ決められた工程を、消化する様に命令された彼女たちには、想定外の問題だろう。

私は判断するまでも無くその場に向かい調査を行うべきだと、そう考えたが、ふと疑問に思う。

「いかがって……この状態で何か出来るのか？」

そもそも、この船は通信行為の為に一度慣性航行を止めてしまっていた。デブリが船に向かってきているのでもない限り、直接手を出す事はおろか、その場所に向かうことすらできないだろう。

「周囲に浮かぶ岩石はこの船より質量が巨大である為、牽引錨を使用すれば慣性力を得られます。その慣性方向をスラスタで調整する事でデブリに接近する事が可能です」

牽引錨はトラクタービームとも言われる重力錨の一種である。

同等の質量までの物質を船に引き寄せる効果があるが、大質量の物に用いれば、逆に物体に引き寄せられていつてしまう。本来ならばそれは自殺行為に等しいが、クレイが言うには上手く調整する事でその力を推進力に変換できるらしい。

「そうか……分かった。出来るなら早速行ってみよう。微弱な信号と言つのも気に掛かる」

「了解しました。進路をデブリ群へ取ります」

その言葉と共に、いくつものオレンジ色の光が近くの岩石へと殺到した。突き刺さった光は、岩石の表面をえぐりながらのたうち回り、瞬く間に船を岩石へと誘う。

ゆっくりだった船の動きは時を経るごとに加速し、視界に映る景色が目まぐるしく変化する。漂う岩石や塵はすぐさま視界の端から消え、巨大な塊のみが目の前を覆い尽くさんばかりに広がっている。

「重力錨、4番から7番をカット」

クレイがそう言いながらコンソールを操作する。

幾筋も走っていた重力錨の光の半数が消え、船の引き寄せられる方向に変化が生まれた。まっすぐに岩石へと向かっていた船が、その向きを変えたのだ。

「重力錨、1番から3番をカット、右舷制御スラスター全力噴射開始」

岩石を捉えていた重力錨が切れ、同時に船を揺るがす程の推進力が右舷より生じる。私は体が引つ張られる感覚に手を握りしめながら、目の前の光景を眺めていた。

そして、岩石に接触する寸前、私の視界は深遠に瞬く星々を映し

た。

「重力加速に成功、進路上の障害物なし。お疲れ様でした。マスター」

「っ……！ はあ……はあ……はあ」

クレイの言葉を聞き、私は溜め込んだ息を吐きだした。緊張のあまり、手には汗がにじんでいる。

視界を覆う岩石の表層に向けて猛スピードで突っ込む等、何度もやりたい行為とは言い難い。

私は落ち着かない呼吸に苛立ちを覚えながら、天を仰いだ。

……

……

……

……

「マスター」

しばらくして、呼吸を整えた私にクレイが声を掛けてきた。デブリの調査を行う段取りを頼んでいたのだが、何かあったのだろうか。

「なんだ？」

「デブリ群の更なる分析の結果、中心に大質量の物体を検知しました。同時に信号を受信しましたが、微弱である為、一部内容の判別ができませんでした」

どうやら人工物からの信号の受信に成功したようだ。視界には、肉眼で見える程の距離に近づいたデブリの姿がある。

「識別信号と映像解析によって、対象物は船である事が分かっています」

「船か、……何か他に情報は無いのか？」

船だと言ったことが分かるのならば、他にも判断できる部分があるだろう。そう思った私は咄嗟に聞き返していた。

「識別信号の一部が判明しています、それによると彼の船の所属は統合政府第43開拓移民船団……あれは——」

問われたクレイはディスプレイを展開し、解析結果の情報を読み上げ始める。所属を告げ様としたクレイは言葉を止め、確かめる様にディスプレイを眺めている。

その形がハッキリと見えるまでに近づいたデブリ群の中心には、確かに船の様な形の物体がその体を晒していた。

朽ち果てスクラップと化した船体からは電気系統が辛うじて生きている事示すスパークの光が見えている。

ディスプレイと、そんな船を交互に見ていたクレイはゆっくりと告げる。

「——あの船は、”特務護衛艦オーディル”、かつて、クレイドル号の僚艦を務めた船です」

クレイの放つ言葉がゆつくりと私の中へと染み込んできた。

すぐそこにまで近づいてくる巨大な船体と、それを取り巻く無数の残骸。

陽光に照らし出された船体の鈍い輝きに私は目を細めた。

遙か昔にこの地を訪れた人類との思わぬ邂逅は、私に、何かが変わり始めた様な、言い知れぬ予感を感じさせていた。

第四話 調査の果てに

「……特務護衛艦……あれがそうなのか？」

私は、目の前に横たわる巨大な船へと視線を注ぐ。

無数の残骸が漂うその場所には、鋭い船首と後部へ行く程に丸みを帯びた歪な船体が在った。

激しい衝撃を受けたらしく、船体の至る所が食い破られたかのように裂け、中央部に至っては碎ける様に真つ二つに折れていた。辛うじて残った船体から、時折零れる紫色の光が、未だに船の電気系統が生存している事を私に伝えていた。

一見、只の鉄屑と見紛うばかりの有様だったが、その上部には突き出した砲塔が姿を覗かせている。

今は動く事の無いその砲身は、彼の船が戦闘艦である事を物語っていた。

”特務護衛艦オーデイル”

船のデータベースに残された数少ない情報によれば、その船は太陽系巡察艦隊に所属する航宙巡洋艦であった。

普段は星域内の治安維持や、不穏分子の取り締まり等を通常任務とする艦であり、今回の移民船団発足にあたり、軍より護衛の任を与えられ、特務護衛艦として船団に付き従っていた様だ。

安全な太陽系内の治安維持を主任務としていたとはいえ、当時最新鋭を誇った軍艦であるあの船が、この様な無残な姿を晒していると言う事に、私は何とも言えない不安を覚えた。

「目標地点に接近、まもなく探査機の活動可能圏内に入ります」

星域図を見ながら、クレイが船までの距離を測定している。高精度レーダーに捉えられた無数に漂う瓦礫によって、星域図はノイズが走ったかのように、白い線や点に覆い隠されていた。

本来ならば、残骸等がレーダーに表示されない様に設定を行うようだが、些細な変化も見逃す事の出来ない今回の様な探査では、敢えて設定を行っていないという。

船は重力加速によって得た慣性力を身にまとい、決して早いとは言えない速度ではありながらも、確実に”護衛艦オーデイル”との距離を詰めていた。

「活動可能圏内への到達を確認、探査機を発艦させますが、よろしいですか？」

「ああ、わかった」

クレイが確認する様に声を掛けてくる。私は軽い言葉を返ししながら、鷹揚に頷いて見せた。

私のそんな態度を確認したクレイが、コンソールに向かい、ディスプレイを叩いて命令を下す。

すぐに指令が伝わったのだろう、彼女の命令を受領したバイオロ

イド達が、確かめる様な仕草で覗きこんでいた腕の端末から顔を上げると、コンソールに向かって一斉に動き出した。

どうやらクレイの命令によって、任務の優先順位が変動したらしい、代替機能を有した別の個体へと業務を引き継いだ彼らバイオロイド達は、与えられた命令を次々と遂行して行く。

「発艦要請を確認。ドッキングベイゲート解放、誘導索射出します」

シールドエネルギーの分配を担当していた男性型のバイオロイドがコンソールを操作すると、船の側面に設けられた巨大なゲートが音を立てながらゆっくりと開き始める。同時に、下部に設けられた突起が勢い良く宇宙空間上へ飛び出し、推進剤を吹き出してその身を固定した。

規則正しい並びで点滅を繰り返す誘導灯が射出されたのだ。

「宙域内デブリ密度が許容数値を超過している為、電磁カタパルトによる射出ができません。マニュアルにて発艦して下さい」

「ゲート周辺部の安全を確認。調査隊は順次発艦して下さい。繰り返します、調査隊は順次発艦して下さい」

周辺宙域の探査を行っていたバイオロイドの女性達もまた、調査隊への発艦命令を繰り返し告げていた。

ゲートの中央で点滅を繰り返していた赤い表示灯が緑に変わり、ハンガーにその身を固定されていた探査機達が、拘束を解かれては宇宙空間に飛び出して行く。周辺宙域には残骸が多い為か、その歩みはゆっくりとした物だったが、次第にエンジンが出力を上げると、

その速度は徐々に本来の物に戻っていった。

「調査隊の全機発艦を確認。調査担当区域及び調査に掛かる優先順位を端末へと送信します。各位、確認の上作業を開始して下さい」

オペレーターを務めるバイオロイドの声に合わせて、一枚のディスプレイが目前に表示された。今回の調査に当たつての優先順位や、確保すべき資源等が羅列されている。それは、今後に必要な物として私やクレイが挙げた物が中心となっていた。

踊る様に舞いながらオーデイルへ向かって飛ぶ探査機を眺めていた私は、クレイに視線を向ける。彼女は様々な言葉が飛び交う指揮所の中で、小さなコンソールに向かっていた。手元では先程の命令に対する報告と思われる無数の情報が現れては消えて行く。

クレイはそうして寄せられる報告に目を通し、更なる指示を与えては、次の報告に目を通すと言った事を繰り返していた。

私は、そんな様子のクレイに船を動かす様に指示を出す。

「クレイ、私達も出来るだけ近くに移動してくれないか」

「分かりました」

「……しかし、優雅に飛ぶ探査機だな」

「ラルス級は探査機と言うわけではありません。種別としては小型輸送艇に分類されています」

私の言葉を受けて、即座に反応を返すクレイ。並列思考でもして

いるのだろうか、私との問答の間の短い時間でさえ手は動き続けている。

カモメと異名を取る小さな船は群れを作りながらゆったりと空間を漂う様に進んでいた。左右に広がる様に突き出した翼に搭載された二基のエンジンが青白い光を放ち、まるで小さな彗星の様に一筋の軌跡を描く。進路上に現れる瓦礫を左右に交わしながら進むその姿は、水面の上で揺れるカモメの様に見える。

そんなカモメたちの姿は、オーデイルの影に隠れ、やがて見えなくなった。

「マスター、信号の解析が終了したようです」

「信号？ ああ、内容が分からなかった物だな」

クレイの言葉に怪訝な表情を浮かべたが、すぐに思い出した私は、その内容に耳を傾けた。

それは、船が放った救難信号だった。通信機器の劣化が周囲に漂う瓦礫の影響か、途切れながら繰り返されるその悲痛な叫び声は、終ぞ誰にも届く事は無かったのだろう。今、それを聞いている私達を除いて……。

「生存者の可能性は……無いだろうな」

そう言うと私は、待機状態になっていた映像を目の前に表示させた。

「外觀からも分かるほどの損傷を受けては艦内の気密は絶望的でしょう。仮に気密が保たれ、電力が生きているとしても、人間が生存

可能な環境とは思えません」

ディスプレイに浮かぶ文字が瞬時に日本語へと変換される。定時報告と共に眼前に現れたそれは、調査隊が送る調査映像の一つだった。

船内調査を行う調査隊の面々はオーデイルの比較的被害が少ない場所から内部に入ろうとしている様だ。状態の良い外装部を切断して侵入口を開けようとしている。

既に開いた穴からの侵入は変形した扉や崩れた壁等に動きを遮られる可能性が高い、そこで一つひとつの障害を突破しながら内部調査を行う方法よりも、新たに入口を設けて確実な通路確保を行う事を優先させたのだった。

小型の切断ユニットからこぼれる紫電の光が、瞬く間に外装を融解させて行く。溶けた外装が気体となって空間上に放出され、瞬時に冷却されて小さな銀色の粒が生み出される。空間を漂う銀色の霧は、紫電の光に照らされてぼんやりと光を放っていた。

外装の切断が終わり、内部の埃が外に飛び出す空気の流れが生み出された。どうやら一定の気密性は保たれていた様だ。

それを確認した調査隊が侵入口に手を掛けては、次々と飛び込んで行く。最後の隊員が姿を消したラルス級から送られる船外映像には、ただ口を開けた侵入口のみが残された。

「後は、調査結果を待つだけか……」

船内の映像も送られて来てはいる物の、通信状態が悪いせいかノ

イズが酷く、薄暗い艦内環境と相まって何一つ判別する事は出来なかった。

艦外の映像も、似たり寄ったりの瓦礫が散乱する光景ばかりで何も得るところが無い為、船内調査隊の映像を見たのだが……、余り違いは無かったようだ。

映像を待機状態に戻した私は、一人そこぼす。

その様子を退屈したと受け取ったのか、クレイが声を掛けてくる。

「調査結果が得られるまで今しばらく掛かるでしょう。船室にてお休みいただいても構いませんが……」

「いや、ここでいい。船室じゃこの絶景は拝めないからな」

「はい、マスター」

私は目の前の風景を指さしながらクレイに笑いかける。椅子を倒し、沈み込む様な感触とクレイの返事を背に、私は滅多に見る事の出来ない宇宙空間の景色を眺め続けるのだった。

……

……

……

……

「マスター、調査隊より中間報告が届いております」

外の景色を眺めるのにも飽きてきた頃、短い呼び出し音と共にク

レイの声が聞こえてくる。彼女は私の休息を邪魔することになるとでも思ったのか、はたまた何か別の用事か、部屋を出て違う場所で作業を行っている様だ。

私は体を起こし、頷くと点滅するディスプレイを拡大させる。そこには回収の完了した資源のリストや、機材、部品の一覧と共に、艦内の映像が届けられていた。

資源のリストはともかく、船の構造を知らない私が部品や機材の一覧を確認したところで大した役には立たないだろう。そう考えた私は、一覧は目を通すだけに留め、共に届けられた艦内の調査映像を確認することにした。

通信によるリアルタイムでの調査映像の確認が出来なかった為、急遽クレイに指示を出し物資の回収と共に持って来させたものである。やはり通信状況が悪かったからだだったようだ、先程見たノイズ混じりの映像とは異なる、ハッキリした映像を見る事ができる。

映し出された映像の向こう側には薄暗い通路が広がっている。時折映る影の様な物とすれ違いながら進む調査隊は、一つひとつの部屋を丁寧にあまり、開かぬドアをこじ開け、使える物が無いかを確かめて行く。

画面に時折入りこむ影が気になった私は、確認する為に停止ボタンを押した。

「うつ……」

それを見た私は思わず口元に手をやった。

時折すれ違う、白い何か。

爆発に巻き込まれて千切れ飛んだであろう腕、胴体から下が消え失せ、悲痛な顔のまま息絶えた壮年の男、顔が判別出来ないまでに赤黒く焼けただれた女。それは、この船が最後を迎えた時に巻き込まれたであろう乗組員たちの変わり果てた姿であった。当時の状態をそのまま持つてきたかのような時間の経過を思わせない姿が生々しく映っている。

しかし、時折映るその凄惨な死体達も、クレイの身につけるそれに良く似た緑色の端末から、その殆どがバイオロイドであることが分かる。不思議なことに、全身が焼けただれる程に火にあぶられてなお、その端末は色褪せてすらいなかったのである。

しばらくして、気分を落ち着けた私は、再び映像の確認を再開した。

亡骸の漂う船内を、調査隊は黙々と進んでいく。時折、物資の入ったコンテナを見つけてはリストを確認し、小さく言葉を交わしては作業機械に乗せて行く。

やがて物資を満載した作業機械を外に送り出す様に指示が出された。

記録係であろうバイオロイドが慌ただしく動き、映像が激しくブレて切断される。どうやら帰還に合わせて記録映像も終わっている様だ。あの様子では調査隊はそのまま奥の探索に向かうようだが……

「クレイ、映像の隊はこの後どういう経路をたどる予定になっているか、分かるか？」

「お待ちを……、彼らは植生プラント及び生体研究施設の調査を行い、帰還する予定となっています」

クレイの言葉を耳に、彼らの現在地が印された船の大まかな見取り図を見ながら、私は考える。

植生プラントに、生体研究施設……、データにはそれぞれが動植物に関連した食料資源の研究開発や培養、育成を行っている施設だと出ている。船同士が物資を融通し合っていた私の生まれた時代とは異なり、この時代の船は自己完結型の艦内システムを構築する事が前提となっている為か、自前の生産設備が充実していた。

そして、艦後部の比較的損傷が軽微な一角に、重要な施設が多い事は嬉しい誤算であった。船の崩壊の余波が少なかったからである。

この調子ならば、施設に不備こそあるだろうが、何か有益なものが得られる可能性が高い。

そうして考えを巡らせている内に、船の各部の調査を行っていた調査隊から次々と報告が舞い込んできた。例によって見ても分からない専門的なリストやレポートは斜め読みに留め、映像による状況確認を行っていく。

「これは、後でクレイにでも聞いて内容を把握しなくては……」

斜め読みをして尚、積み上がっていく未閲覧の文字や理解不能に近いレポートの内容に霹靂とした私は、ブツブツと小言をこぼしながら調査映像に目を通して行った。

.....
.....
.....
.....

薄暗い通路を、淡々とした歩調を崩すことなく男達が進む。

足元に散らばる、朽ち果てて剥がれ落ちた瓦礫を踏む事無く進むその動きは、訓練を経て身に付けられた者のそれだった。

彼らは手に銃の様な物を握りしめている。銃口に当たる部分から伸びる光が周囲を明るく照らし出すところを見れば、照明機器として用いられている物だと幾人かは納得してしまうだろう。

しかし、それは立派な武器であった。

携行型光学拳銃という種別に分類されるそれは、束ねた光を射出する事で相手に失血を強いる小型火器である。

最も、その様な大層な名前が用いられる事は無く、世間一般においては別名である”凝集光銃”の呼び名こそが広く認知されていた。出力を調整する事で扉の切断から携行火器、暗闇を照らすライトまでと幅広い用途に対応する非常に便利な代物である。

出力を最小まで絞った凝集光銃を、照明として用いながら、一行は船の奥へと進む。

金属で出来た通路はいつの間にか終わり、両側の壁はガラスに覆われた物へと変化していた。ガラスの向こう側は収穫期を迎えたと思しき小麦の穂が茂っている。残骸と呼ぶに相応しい外見へと船が

変貌して尚、植物達は枯れる事無く実っていた。

信じがたい事ではあるが、この区画——植生プラントは未だその機能を喪失しては居なかったのである。

「こちら第12調査小隊、識別コードSc0012-Ex0930。クレイドル号管制、応答願う」

歩みを止める事無く植生プラントを進むバイオロイド達の1人が端末に向かって声を上げる。

『こちらクレイドル号管制。要件をどうぞ』

まもなく、端末から応答があつた。

聞こえてくるバイオロイドの声は、無機質ではある物の、男達の間とは違い、柔らかな表現が用いられていた。

「植生プラントの健在を確認。施設は現在も自立稼働下にある模様、ケース303の適用を申請する」

『ケース303の申請を受理……エラー。……該当申請事項に独自処理制限を確認しました。別命あるまで現任を遂行してください』

「小隊了解」

通信を切り、端末から顔を上げた男は、後ろに続く隊員へと散開を命じた。既にガラス張りの通路は終わり、広い空間が周囲に広がっている。

指示を受けた男達が二人一組となって室内へと散って行く。

彼ら第12調査小隊は、食糧生産施設の調査と、食糧資源の確保を命じられていた。

『こちらクレイドル号管制。ケース303の申請が受理されました。第2、第7、第14小隊及び工兵中隊がそちらに派遣されます』

クレイドル号からの連絡が入ったのは、彼らが状態の良い食料資源を吟味している最中。内容は、第12小隊の元へ増援が送られたと言う物だった。

ケース303――、設備の接收提案が受理された結果である。

「確認した。後続に合流し任務を続行する」

短くそう返答して、作業を続けようとする彼らを遮る様に、管制からの通信は続く

『クレイ管理官より第12調査小隊の現任解除要請がありました。任務は前述の各小隊に引き継がれます。第12調査小隊は調査対象区画の繰り上げを行い、任務を再開して下さい』

「了解。調査対象区画の繰り上げを行い、生体研究施設の調査を開始する」

そんな言葉に満足した様に、通信が切れる。

男が顔を上げると、目の前には既に部下たちが集まっていた。通信の途中から、任務の変更が隊員の端末へと送信された為である。

軽くうなずいた男は、扉を開けて広間を後にし、後ろには部下達が続く。

彼らが去った後には、今にも崩れそうな程に、うず高く積み上げられたコンテナが残されていた。

.....

.....

.....

.....

命令を受領した第12小隊は、植生プラントを抜け、生体研究施設内を進んでいた。

毒々しい色合いの警告表示がなされた扉を潜ってからかなりの時間が経過している。いくつかの研究成果を回収した彼らは、その歩みを止める事無く更に奥を目指し、進んでいた。

黙々と進む重苦しい雰囲気をもった彼らの元へ、端末から声が届けられた。それは、幾度目かの命令変更通知であった。

彼らは生体研究施設内に置いて既に数回の優先調査対象の変更を受けている。人間であれば士気の低下を招きかねない頻繁な命令の変更もバイオロイドである彼らには関係が無かった。淡々とした口調で命令を受領し、それを遂行して行くだけである。

『こちらクレイドル号管制。クレイ管理官より生体研究施設内の調査項目の更新通達がありました。情報を送信します』

その言葉と共に、男達の端末へと更新された情報が送られてくる。それを確認した男は端末から顔を上げ、部下へと視線を巡らせた。

その視線に、遅れながら顔を上げた男達は小さくうなずいた。任務の内容を把握した事を示すうなずきである。

返答に満足したのか、船内の立体図を目の前に表示させた男が、探索ガイドへとデータを入力して行く。それは既に判明している場所への案内を行う音声ガイドであった。

男達が声に従い、辿りついた場所は異様な雰囲気の部屋だった。円筒形をした部屋の天井は高い。部屋の中は閑散としていたが、中央にそびえる塔の様な柱と、それを取り囲むように埋め込まれた無数のシリンダーが壁から頭を覗かせていた。

シリンダーは、内部の液体の発光によって、不気味な光を放っている。

培養室。そう名付けられた部屋の中へと男達は進む。

彼らは、中央にそびえる塔の下まで来ると、円周状に散開し、周囲を警戒する様に、油断なく辺りを見回している。

そんな輪の中、一人の男がコンソールを操作し、設備の稼働状態を調べていた。画面には稼働中を示す緑のラインが無数に引かれ、所々に故障や破損を示す黄色や赤のラインが表示されている。

状態を確認した男が端末に手をかざす。

「こちら第12調査小隊。クレイドル号管制、応答願う」

『こちらクレイドル号管制、どうぞ』

「優先調査対象の稼働状態を確認した。現在稼働状況83%を維持。正常稼働中と判断。規定に基づきケース303の適用を――」

言いながら体を動かした男がコンソールに当たり、上に置かれていた物が転がり落ちて、ボタンを押した。

途端、部屋を包む照明が危険を告げる赤い警告灯に代わり、施設が動く事を伝えるアラームが鳴り響く。

中央にそびえる塔が低い振動を響かせながら腕の様な物を伸ばし、シリンダーの一つを掴むと、壁から引き抜いた。腕は、部屋の床近くまでシリンダーを運び、金属の擦れる甲高い音と共に床に降ろすと、元の位置まで戻っていく。

腕が柱の中に吸い込まれる様に姿を消す頃には、赤い警告灯は消え、元の静かな部屋へと戻っていた。

端末に手をかざしたまま、シリンダーを見つめていた男が再び口を開く

「適用申請を撤回。独自処理制限に規定された状況に遭遇。映像を送る。管理官の判断を求む」

そう言って通信を切断した男は、感情の無い瞳で目の前のシリンダーへと、再び視線を向ける。

男の眼前に立つ不気味な光を放つシリンダー。

その中には、穏やかな様子で目を閉じた、一人の女性が浮かんでいた――。

.....

.....

.....

.....

「.....これは.....」

送られてきた映像を見ながら、茫然とつぶやいた。

鮮明とはいえないリアルタイムの映像だったが、その異様な雰囲気はなんとか見て取る事が出来たからだ。

「.....培養シリンダー内に人間を入れるなど、無茶な話です」

子宮を満たす羊水と同じ働きをもたらす様に作られた培養シリンダー溶液は、決して有害な物ではない。

しかし、それは培養シリンダーを母とする生命に取ってであり、成長した人間に対してその影響は未知数であった。過去に――クレイの知る限りではあるが――その様な事例が無かった為でもある。

「これは大丈夫なのか？」

「分かりかねます。見たところ成長を促進させる培養液内にあつて肉体的な劣化が見られません。恐らく仮死状態にしてから培養シリンダーに入れられたのでしょう」

浮かぶ女性の様子を見ながらクレイが推測を述べる。どうやら彼女も戸惑っているらしく、明確な答えを返す彼女らしくない、憶測の混じった答えだった。

「……他にも同じ様な状態の者がいるかもしれない。可能な限り連れ出してやってくれないか」

「了解しました。至急、その様に手配いたします」

私の言葉にクレイがそう答え、端末から指示を出す。

ノイズ混じりの映像の中には、バイオロイド達によってシリンドーごと運び出される女性の姿が映っている。

培養シリンドーの中に人間が入る事は無い。クレイはそう言っていた。と言う事はあの船、オーデイルが巻き込まれた状況が関係しているのか、それとも全く違う事情からなのかは分からないが、彼女にはそうしなければならぬ事情があったと言う事だろう。

「なににせよ、彼女が無事に意識を取り戻さなければ意味の無いことか……」

そう呟いた私は椅子に体を預け、深い溜息を吐いた。

……
……
……
……
……

「マスター」

どれ位の時間が経っただろうか、物想いにふけていた私を呼ぶ声がする。意識を思考の海から引き揚げた私は、言葉のする方向へと振り向いた。

すると、私の眼前には無数のディスプレイが展開され、人の名前らしきものが描かれたリストが表示される。中には名前とは呼べない記号の羅列すら含まれていた。

「これは？」

振り返った先では、クレイが片腕を上げ、端末に情報を入力している所であつた。

「船内より発見された者達のリストです。乗組員名簿に登録された人間が34名、バイオロイドが324体。その他判別不能が55名となっています」

その言葉に、私は表示されたリスト見る。良く見れば、名前の横に死亡を示す赤い表示が並んでいた。唯一救出されたシリンダーの女性と数体のバイオロイドのみが黄色くなっており、仮死状態とされている。

「これが彼女と同様にシリンダー内に？」

私は表示されたリストの黄色い場所を指さした。

「はい、バイオロイドで数体、自閉処理された個体が回収されています。人間の方も数名、女性と同様の状態で発見されましたが、シ

リンダーの組織体維持装置の故障やシリンダー本体の破損により、残念ながら……」

「そうか……仕方ない……それで、自閉処理と言うのは？」

「バイオロイドが、自ら持つ情報を残す事のみを優先した状態でも言うのでしょうか。自閉処理が施された者は記録の消去が行われなくなります。その代わり、そうなる以後は自我を失い、只の記憶媒体となってしまうが……」

クレイはそう言って言葉を濁す。

バイオロイド達は人間のそれと比べて膨大な記憶領域を有している。そして、クレイに代表される管理人格型と呼ばれるバイオロイド達は、自ら学習して知識を蓄え、思考を進化させていく。

『集積した知識は容易に利用されて良いと言う物では無い』

感覚器官を有したバイオロイドに人格プログラムを組み込んで管理人格とする事が決まった時、彼女たちの設計者はそう言ってコアプログラムに記憶や記録が、一定条件下で消去される様に組み込んだ。

それは、管理人格の主人格が死亡した場合や、登録の解除を行った場合の他、本人の望まぬ状況、つまり洗脳や尋問、拷問などによる情報の強制的収奪を受けた時であった。だが、尋問や拷問はともかくとして、広大な宇宙空間でいつ起こるとも分らない主人格の死亡や、主が代わる度に行われる登録解除によって集積した知識が失われる事を、一部の者は許容できなかった。

しかし、度重なるコアプログラムの改変によって分かった事は、人格形成の根幹をなすそのプログラムに触れる事は困難を極めると言う事実だけであった。

既に死亡していた設計者を頼る事も出来ず、結果として歪な形ながら、記憶や記録の保持のみを行う事を目的とした機能がコアプログラムに追加され、専用の設備で記憶を有したまま登録者を変更できるようになった。

そして、その機能を発現した個体は総じて自我を失い、反応すら無くなる事から自閉状態と呼ばれ、バイオロイド達をその状態にする事は自閉処理と呼ばれた。

「それで、自閉状態を解除する設備はここに？」

「はい、問題ありません。バイオロイドを扱う船である以上、クレイドルにもそれらの設備は用意されています」

「よし、それなら自閉状態の解除を行う様にしてくれ。今はどんな情報でも欲しい」

「はい、マスター」

私の指示を受けたクレイがコンソールに向かい、船に残る者達へと指示を飛ばす。

それは、シリンダーの女性や、自閉処理されたバイオロイド達を受け入れる為の準備を指示する物だった。

クレイの言葉を聞きながら、朽ち果てたオーデイルを見る私の視

界に、数機の編隊を組んでこちらに向かうラルス級の姿が映る。後ろには構造物の様な物がワイヤーによって接続され、牽引されている姿も見えている。恐らく報告の中に在った損傷の少ない重要施設だろう。

「マスター、参りましょう」

「ああ」

モニターの中では、船に近づいたラルス級が、船体の横に開いたゲートへ、吸い込まれる様に飛び込んで行く姿が映し出されていた。

未知の宇宙で散って行つた者達。

彼らの姿を目に焼き付ける様に、私はハンガーに固定されて行くラルス級の姿を見つめ、踵を返して指揮所を後にした。

無事に任務を果たし、帰還した彼らの元へと向かう私の後ろで、重い音と共に扉が閉まる。

その、反響して響く音は、まるで何かの始まりを告げる鐘の音の様に、甲高い音色を周囲に響かせていた。

第五話 あの新き星へ

あの後、クレイを伴って指揮所を後にした私は、ラルス級が収容されたハンガーに立っていた。

部屋に入ると作業を止め、こちらを向いて一斉に敬礼をするバイオロイド達の姿に、思わず体を硬直させた事は言うまでも無い。

「マスター」

若干気後れしながら、そのまま進もうとする私を呼びとめる声があった。訝しく思いながら、私は声の主であるクレイへと向き直る。

「ん？ どうしたんだ、クレイ」

「答礼を」

短く、窘める様なクレイの言葉に、突き刺さる視線の様な物を気が付いた私は顔を上げ、視線を戻す。

そこには、手を額に付け、動かぬままにこちらを見つめるバイオロイド達の姿があった。微動だにしない姿勢と、一切の感情を排した光を灯さぬ瞳に、薄ら寒い思いを感じた私は思わず一步下がってしまう。

「す、すまん」

その姿に気押された私は、誰に向けての物か分からない謝罪の言葉と共に、額に手を当て、答礼を返す。しばしの間、私達は無言で

見つめ合い、そして腕を降ろす。

すると、それが合図だったかの様に、バイオロイド達は各々が与えられた仕事へと戻って行った。ハンガーには喧騒が戻り、緊張した空気が四散する。

私は小さくため息をこぼすと気を取り直す様に首を振り、クレイを伴って奥へと進んだ。

ハンガーの奥、持ち帰った物資を満載したコンテナが立ち並ぶその一角で、バイオロイド達の喧騒へと耳を傾けながら、私は目的の物を見た。

そこには、嚴重な封印が施された棺のような物が横たえられていた。内部には回収されたシリンダーが格納されている様で、それぞれの容器に満たされた液体の中には、女性や男性の姿が浮かんでいる。

まるで、眠りについたまま持って来られたかの様な、穏やかな寝姿であった。

「これが……」

「はい、映像にあった通りです」

クレイの言葉に、しばらく無言でシリンダーを眺めていた私の前を、複数のバイオロイド達が通り過ぎた。彼らはシリンダーを入れた箱を丁寧に搬送用の台車へと乗せると、ゆっくりと何処かへ運んで行く。

映像越しでは無い、ありのままの姿をその目に焼き付けた私は、

バイオロイド達に運ばれて行く彼女達の姿を見送ると、クレイに尋ねた。

「彼女達は？」

「バイオロイド達は、自閉処理の解除へ、女性については仮死状態からの蘇生処置を行います。しかしまずは状態の調査と診断でしょう。どういう状態かを正確に知らなければ取りうる手段が分かりませんので」

「そうか……分かった。万一の無い様によろしく頼む」

「はい、マスター」

クレイの説明に、自分の出来る事は無いと感じた私は、当たり障りの無い言葉だけを返す。

対するクレイの気負う事の無い返事が、喧騒の中、やけにハツキリと耳に届いた様な気がした。

.....

.....

.....

.....

その後、遺体の確認やその安置を指示した私は、クレイを伴い指揮所へと戻った。オーデイルから得られた情報に基づいて今後の方針を決める為である。

現在、クレイドル号はオーデイルに付き従いながら、外周を漂う

残骸を回収しては、資源へと作り変える作業の真つ最中であつた。

空間を漂う岩石を回収して資源を生成するのと異なり、精錬された金属を使用していた残骸は、苦労する事無く資源を得る事のできる、宝の山の様な物だつたからである。

今もまた、重力錨によつて捕えられた残骸が船体下部にある採鉱デッキへと吸い込まれていく。

そんな様子から、室内へと視線を戻した私は、表示される回収品リストを眺める。

部屋の中央に置かれたテーブルには、無数の資料が乱雑に置かれ、電子化された一部のデータが空間ディスプレイの上に表示されている。

「植生プラント、生体培養施設とそれに付随する各生産設備……これはまあ良いか。むしろ食糧資源の安定供給が可能になるのだから願つても無い。しかし、それ以外が火器や重火器、戦闘仕様の艦載機と、戦闘に特化しているのは何とかならなかつたのか」

私はそう言いながらディスプレイを消し、クレイに向き直る。今回の調査によつて、オーデルから得られた物資は何かしらの兵器や火器が中心となつていた。優先的に回収させようとした設備の殆どが使い物にならなかつた事に加え、元々が軍艦と言う軍事に特化した船であつたのだから、得られる物が偏るのは仕方ない事であつた。

「これらは我々が持たない物です。まず間違いなく役に立つてくれるでしょう」

私の言葉に涼しい顔でそう返すクレイ。

確かに、移民船であるクレイドル号には武装と呼ばれる物が殆ど無い。ある物と言えば警備を担当していたバイオロイド達が持つ凝集光銃だけである。それが今回の探索によって大幅に強化された。しかし、移民船であるクレイドル号にその様なものが必要かどうかは疑問であった。

「まあいいか……、しかし、ちゃんと使えるのか？ 元々形も違う船から引つ張り出してきた物だろう」

判断を保留した私は問いかける。兵器などは奪われた時に使用できない様に工夫すべきものである。それが軍艦同士ならまだしも、移民船等に搭載して使える物だろうか。

「ユニット単位で運用する各設備は増改築に適した構造をしていますが、そちらに関しては問題ありません。兵装ユニットについてもそれは同じです」

クレイドルやオーデイルに限らず、その時代に造られた船は、その殆どが設備の増設や解体が容易なユニット工法を用いて建造されていた。

ユニット工法は、船体を区分けして建造するブロック工法を更に小規模にしたものであり、単体機能を有したユニットを一つの形として製作し、それを中枢部に肉付けする様に接続していく工法であった。

用途に合わせた船を、安く大量に建造する事が出来る他、故障や

破損によって機能が失われた時の修理も容易であつた為、その工法と、それを使って造られた船は、当時の主流を占めていた。

その勢いは凄まじく、この時代に造られた船の数はそれまでの平均建艦数の数倍から数十倍とも言われている。

ユニットを最小単位として構築された船である為、構造的に脆いと言う欠点こそ抱えていたが、宇宙空間上での船舶運用を主としていた人類にとって、それが深刻な問題とならなかった事もその繁栄を後押ししたと言える。

「なるほど……と言う事はもう？」

「はい、既に外周部に各ユニットを展開し組み込み作業を行っています」

そう言ったクレイは、別のディスプレイを展開させて一覧を表示させる。

一定時間毎に更新される画面には、今回手に入れた施設や設備の一切が表示されていた。稼働中を示す表示や作業中を伝える表示が逐次更新され、作業の進捗を知る事ができる。それを見る限りでは、発見された設備ユニットが全て組み込まれるには、まだまだ時間が必要だろう。

「すぐには終わらないな……わかった、作業はそのまま続けさせてくれ」

「了解しました」

私の言葉によって、設備については現状が維持される様だ。了承の言葉と共にクレイは周囲に表示されたディスプレイを消して行く。

「よし、次は手に入れた情報を見て行くでしょうか。クレイ、悪いが説明を頼む」

ディスプレイが消えた事を確認した私は、クレイに向かって小さく頷き、先を促した。

「分かりました。まずはじめにこちらの資料ですが――」

クレイの説明に耳を傾けながら私は資料に目を通して行つた。

オーデイルから手に入れた情報は多岐に上り、朝食後に始まつたこの会合は、幾度かの休憩を挟み、夜になってようやく終わりを迎えた。最も、恒星の輝きも、星達の瞬きも変わる事は無い。腕時計の文字盤や、時刻を告げるアラームが無ければ、今がいつなのか、知ることすら出来なかつただろう。

有益な情報を選別して、更に重要度の高い物から選び出したうえで、それだけの時間を要するのだ。全ての情報へ目を通すにはどれだけの時間が掛かるのか、見当もつかない。

しかし、それによって得られた物は多かった。オーデイルの持つデータベース、そのいくつかを手に入れる事が出来た為である。そこには、人類との合流を目指す私達にとって重要な当時の星図は勿論、そこに至るまでの航路図すらも存在していた。

驚く事に、それらの資料を読み込んで行くと、当時の人類は銀河系の実に1割近くを手中に治める大勢力であつた。

1割と聞くと少なく感じるが、10万年もの距離を持つ銀河の1割、すなわち1万年にも及ぶ長大な版図である。それは地球と地球を取り巻く太陽系のみが勢力圏であった私の時代から見て、十分な規模を誇っていると言える。その当時から数百年は経過したであろう現在ではさらにその版図を広げている可能性すらあった。

だが、いくら場所が分かっても辿りつけなければ意味は無い。星図が指し示す座標は、エンジンが正常に動かない現在のクレイドルでは、私が生きている内に決してたどり着く事の出来ない場所であった。

「後は推進力の問題だけか……」

船の推進力を生みだす原動力であるエンジン。今現在破損して使い物にならないそれは、本来ならば換装してしまえば済む話である。

しかし、船の基幹部品となるエンジンは、ユニット工法において換装する事を前提とした造りになっていない。その為、こればかりは修理するしかないのだが、それは不可能だろう。

そもそも、修理ができるのならば、この船を放棄する必要は無かったのだから、放棄された時点でこの可能性は潰えていると言える。

「はあ……」

堂々巡りの展開に、小さなため息をこぼす。疲れた体を椅子に預け、天井を眺めた。ガラス張りの天井の向こう側には数多の輝く星と、暗い空間が果てしなく広がっている。

「マスター」

そんな様子の私にクレイが声を掛けてくる。私は、体はそのままに頭だけを起こしてクレイを見る。

「どうかしたのか？」

「推進力ですが、解決する方法はあります」

「本当か！」

思わぬクレイの言葉に椅子から跳ね起きると、クレイへと詰め寄る。

クレイによれば、クレイドル号のエンジンが不調となったのは、自然重力下で製作された構造部品が原因であると言う。調査の結果、部品の設計段階でのミスが見つかり、修正案はすぐに出来上がったらしい。

「それなら、すぐに修理できるんじゃないか？」

「構造部品の生産は自然重力下、つまり惑星上の一定重力下で無ければ行えないのです」

疑似重力はあくまでも疑似的な重力にすぎない為、自然重力下での加工を前提とした部品を宇宙空間で調達することなどできるはずもない。

恐らく彼らも悔しい思いをしていたに違いないだろう。

「ですが、今ならばその問題はありません」

「どういう事だ？ …… そうか！」

問題は無いと言う言葉に、訝しげに呟いた私だったが、彼女の視線の先に在る物を見て瞬時に悟る。そこには、光を受けて輝く美しい惑星の姿があったからである。

「お察しの通りです。あの惑星、データベースには『テロス』の名で登録されていますが、重力や大気の構成は地球とほぼ同等の様です。植生については現地を調査しなければ分かりませんが、軌道上から映像解析を行った限りでは、原初の地球と同じと考えて頂ければよろしいでしょう」

テロスへと降り立ち、エンジンを修理して人類の勢力圏へと向かう。クレイが語るその内容は、十分に検討する価値を持っていた。少なくとも、寿命を超越した上で、数百年に渡る慣性航行を行い、宇宙を旅する事に比べれば遥かに現実的である。

「良い案だと思う。と言うより、現状他に手段が無いか……」

私は表示された資料を閉じると、宙域図を呼びだして目の前に表示させる。

半透明の宙域図の向こう側、宇宙空間上での作業は既に佳境に入っている様だ。あれほど浮かんでいた残骸はきれいさっぱり片づけられ、視界を遮る物はオーデイルの巨体のみとなっている。

「それでは……？」

探る様にこちらを見ながら言葉を紡ぐクレイへ向かって、軽く頷きながら私は言った。

「ああ、テロスに着陸して、エンジンの修理を行う。その様に手配を頼む」

「了解しました。これよりテロス重力圏への突入準備に入ります」

力強く返事を返したクレイはコンソールへと向かう。端末をかざして既に指示を飛ばしているらしい、空間の上を慌ただしく指先が動いていた。

「任せた」

作業に没頭するように体を動かすクレイに、短く声を掛けた私は椅子に背中を預ける。流星に丸一日座り続けていたと言う事実は辛い物がある。

椅子に座りながら軽く伸びをした私の背骨が小さく、連続した音を奏で、それによって血が全身を巡り始める。

「マスター、後の事はお任せになり、船室にてお休み下さい」

ディスプレイに向かいながら休息を薦めるクレイの言葉に、私は甘える事にした。

「ああ、わかった。すまないが少し休ませてもらう」

「すぐ上が艦長室となっています。専用の通路がありますのでそこらをお使い下さい」

手を止め、入ってきた入口とは別の扉を指し示すクレイ。作りこそ変わらない物の、扉の両脇には装飾が施されている。なるほど、艦長室と言うのは間違いない様だ。シンプルな作りながらも、丁寧に加工された装飾を眺めながらそんな感想を懐く。

通路へ出ると、音を立てて隔壁が開き、室内灯が次々に点灯して行った。そんな室内灯の明りに誘われる様に私は歩く。

隔壁が静かに降り始める音が背後に響き、指揮所へ続く扉が閉ざされる音が耳に届いた。その、堅く冷たい金属の響きを楽しみながら、私は扉の前に立つ。

金属の擦れる様な音と共に、扉が開き、照明が自動的に点灯して、部屋の主である私を迎え入れた。

疲れた体を休めようとベッドへと歩みを進めた私の視界に、一つの端末が映る。

それは、この船の乗組員名簿に登録された際にクレイから渡された携帯端末であった。確か、あの時は体が痛くて装着できず、部屋に届けさせたのだったか……

小さな端末の画面の中では、クレイから送られたであろうメッセージが、未開封のまま残されていた。

端末を手に取り、ベッドに腰を降ろした私は、倒れ込む様に枕に頭を埋め、手に持った端末をかざしながらメッセージを開く。

映像メッセージとして端末から浮かび上がったディスプレイには、

無表情でこちらを見つめるクレイの姿が映し出されていた。

彼女の話は、船への乗船を歓迎すると言っ言葉に始まり、端末に関する説明から、状況の概略までを淡々と説明した物だった。

「……いまさらだな」

苦笑とも呼べる笑みを顔に浮かべた私は、一人呟く。

今、耳に聞こえてくる説明などは既に口頭で一通り教えられている。そして、そんな説明が霞むほどの体験を、ここ数時間で立て続けに味わったのだ。今さらこのような簡易音声ガイドが何の役に立つのだろう。

私は、端末の画面に映るクレイの顔を見ながらベッドへと身を伏せる。手に持った端末は投げ出され、弧を描いて椅子の上へと収まった。体重を受けて沈み込むベッドの感触が酷く気持ちいい。

未だ端末から流れ続けるクレイの説明を子守唄に、私は心地のいい感触に包まれながら眠りに就いたのだった。

第六話 墜ちる揺り籠

夢の中を漂っていた私は、大きく響く音と身を揺らす振動によって目を覚ました。

床を揺らす振動は一瞬で治まった物の、その被害は大きかったようだ。壁に掛けられた絵画は固定が外れて床に落ち、高級そうな意匠が施された花瓶は、私の眠るベッドの上に落ちたのか、中を満たしていた水が私の服を汚している。

未だ揺れの影響が残っているのか、天井より吊り下げられた照明が、円を描く様に揺れていた。

しばらくして、部屋の中が落ち着いたと判断した私は、椅子から転がり落ちた端末を腕に装着し、クローゼットから新たな服を取り出して身に付ける。それは、船の標準服として支給されている白い制服であった。

バイオロイド達が身に纏う物と同じ白い制服の左胸には、所属する船を示すシンボルが輝いている。本来ならば肩口には船員の等級を表すエンブレムが付けられると言うが、突然この船を訪れ、成り行きで艦長となった私にその様な物があるはずもない。

制服を身に付け、どこからどう見ても船員としか思えない姿となった私は、扉へと向かう。クレイに通信を入れて見た物の、事態の収拾に追われているのか、端末からの通信に障害でも発生しているのか、私の呼び出しにクレイが出る気配は無い。

通信を諦めた私は扉の前に立ち、開くのを待った。しかし、扉は

冷たい反応を返すだけである。

よく見ると、自動開閉機構が先程の衝撃で切れている。幸いにも電気系統は生きているらしく、扉を開閉するプログラム自体は動いていた。

表示された開閉プログラムに手をかざすと登録者の認証を行う様にプログラムが走り始める。

ふと落ち着かない気分になった私は、部屋へと視線を向ける。椅子に掛かった目的の物を目にとめた私は部屋へと戻り、それを肩に掛けた。

いくら服が代わっても手放す事の無かった白衣。長年遣い続けていた為か若干くたびれてはいるが、研究室が家であった私にとってそれは既に無くてはならない物となっていたのである。

肩に白衣を掛けたまま扉の前に戻った私は、再びプログラムへと触れる。先程中断された認証が再開され、やがて扉はゆっくりと開き始めた。

私は、非常灯が点灯して薄赤く照らされた通路を進み、指揮所へと向かう。腕が通され、疑似重力によって下へと引かれた白衣が、私の歩みによって生まれた空気の流れ乗る様にはためいている。

隔壁は正常に動いて指揮所への道を開いてくれた。私は、注意深く周囲を見回しながら、指揮所への扉を潜る。

部屋に入った私の視界に飛び込んできた光景は、寝る前に見たそれとは違った様子を見せていた。

情報を流し続けていたパーテーションの様な物は軒並み横倒しになり、むき出しになったコードは切断されてスパークしている。運悪く巻き込まれた者が這い出そうともがき、同じく傷を負った同僚に助けを求めている。

至る所で同じ様な光景が見られるが、無事な者も多い様だ。既に救助が始まっている。

私は、その様子に一先ず胸をなでおろし、周囲を見回す。忙しく動く彼らの中に、クレイの姿は見当たらなかった。

不安に駆られる様に周囲を見回した私は、倒れた者の中に彼女がいないかどうかを見て回る。

「クレイ！」

そして、一人のバイオロイドの近くでうつぶせに倒れる彼女の姿を見た。慌てて駆け寄りクレイを抱き起こした私は、その様子を確かめる。どうやら気を失っているだけの様だ。しっかりとした呼吸によって上下に動く胸元が、彼女の生存を教えてくれていた。

私は、気持ちを落ち着けるように咳払いをすると、近くに座る女性型バイオロイドに声を掛ける。思考を止めた様に虚空を眺めたまま、身じろぎすらしなかった彼女だったが、私の声によって意識を取り戻したのか、救助に参加する様に促す私の言葉を受けて、足早に立ち去った。

その姿を見届けた私は、クレイを抱えすぐ傍に鎮座するコンソールへ向かう。先程までクレイがこれらを確認し、指示を出していた

のだろう。船の被害状況や、船員のバイタルなど様々な情報が届いており、それに対する指示が途中で途切れる様に止まっていた。

コンソールの履歴を調べてみると、ほぼ全ての対処は終わった後だった。すでに船内の各区画で働くバイオロイド達に対する避難指示は出されており、重要資源や物資も避難指定区画へと運び込まれ始めていた。

残されたのは目の前の彼ら、本部要員と呼ばれている者達だけであつたが、彼らには途中で中断されていた指示を私の権限で発効している。後は救助が完了すれば、避難区画へ向かうだろう。

「まずは何があつたのかを、調べないと」

普通ならば、これぐらいの衝撃で船が機能不全に陥るはずも無い。にも拘らず、態々避難区画まで設定して事態の収束を待つような積極性に欠ける命令をクレイは下していた。

人がまばらになり始めた指揮所の中で、私は事態の把握を行うべくコンソールへ向かう。私の操作によって次々に浮かび上がるディスプレイが、この船に何が起こつたのかを映しだそうとしている。

クレイの意識があればこの様な事をするまでも無く知る事ができるのだろうが、生憎と彼女は膝の中で眠っている。

穏やかな横顔に視線を落としながら、私は目的の物を探す。船の内外に設けられた監視カメラの映像記録である。

あの振動は何か船にぶつかった様な物だった。だとするならば、接触する前後の艦内を見る事ができれば、クレイの出した避難命令

の理由も分かるかもしれない。

映し出されたのは今は何の反応も返さないノイズの混ざった画面。先程の振動以降、映像が途切れた監視カメラの物だった。これを遡れば何が起きたか分かる。

コンソールを操作し、巻き戻る映像を食い入る様に見つめる私の頭上に不穏な音が響いた。見上げた私の視線の先には、先程の振動を何とか持ちこたえた大型モニターがある。上に何か瓦礫でも乗っているのか、固定具が悲鳴のような音を立てて曲がり、接続された電気ケーブルがブチブチと音を立てながら引きちぎられていく。

「っ！」

剥離した内壁の一部と共に、落ちてくるその姿を見た私は、咄嗟にクレイを引き寄せると、コンソールの下へと潜り込んだ。コンソールの陰に入って間もなく、剥がれ落ちたモニターは甲高い音と共に私たちの頭上へと降り注ぐ。眼を閉じ、大きな音と振動に背を向けて、私はクレイを強く抱えながらコンソールの陰で耐える。

振動と音が去り、静けさが戻った様子に私は眼を開ける。しかし、コンソールの上には何かが覆いかぶさるように乗っており、僅かな隙間から外を眺めることしか出来なかった。

動かそうと手で押してみるが、ピクリとも動かない。

ふと、身じろぎをする感触に、自分が抱えている彼女の事を思い出し、視線を向ける。そこには、こちらを上目遣いに見つめる青い瞳があった。

「マスター？」

意識を取り戻したばかりで、何が起こったのか理解出来て居ないのだろう。私は簡単に、彼女が倒れていたことや、落ちてきたモーターの下敷きになっている事を説明した。

「ありがとうございます。マスター」

事情を聴き、事態を把握した彼女は真摯な瞳で礼を述べた。そんな視線に恥ずかしくなった私は、顔を背け、おざなりな返事を返してしまう。

「いや、無事でよかった」

お互いに声を発さず、気まずい沈黙が広がる。しかし、その沈黙も何かを激しく叩く音で遮られる事になる。

「今度はなん……っ！」

「お静かに、マスター」

次から次へと起こる得体の知れない状況に、耐えかね叫び声を上げそうになる私の口を、クレイは手で覆う。その視線は光のこぼれる隙間へと向けられ、瞳には真剣な光が浮かんでいる。

音は聞こえなくなっていた。

その視線の先に何かがあるのか、無表情が多い彼女の瞳の光が気になった私は、彼女にならって亀裂の先へと眼を向ける。

そこには扉以外は何もなかった。

そんな様子に安堵した私だったが、激しい爆発音と、それによって吹き飛ぶ扉に表情を凍らせた。暗い通路に向けて風が吹き、舞い散るほこりが、引き寄せられるように通路へ向かう。

そんな空気を切り裂く様に、無数の人影が室内に走り込んできた。

ガチャガチャと音を立てながら部屋の中へと散っていく人影は、全身を金属で補強された黒い気密服で覆い、目に当たる部分から赤い光を放つヘルメットを被っている。長い銃器の様な物を肩から掛けた無骨な装いの集団は、オーデルから亡骸を回収した、軍人の様な格好だった。目立たないが、血糊の様な物が体に付着している。

部屋の中へと散った黒尽くめの集団は、銃器を構え、油断なく周囲に目を配っては、口々に同じ言葉で叫び合っている。

その叫び声が途絶えると、護衛に囲まれた上官らしき者が入ってきた。周囲をゆっくりと見渡すその姿は堂々としており、顔は見えないが、経験を積んだ一流の風格を見せている。

次々に胸に手を当てた敬礼をする兵士達の様子に私は、以前テレビで見た特殊部隊の話を思い出していた。

報告をしているのだろうか、部下と思われる男達が走り寄っては敬礼をし、その男に大声で話している。

その内容は分からない。こちらまで届くその言葉は、私が今まで聞いたどんな言葉とも違い、正確に聞き取る事さえできなかった。

ふと、クレイを見る。もし可能なら……今は無理でも、後から何か分かるかもしれない。

「……クレイ、録音……できるか？」

「……先ほどから行っています」

小声でそう返してくるクレイの髪を、私は少し乱暴に髪を掻きまわした。出来の良い後輩研究員を褒める時に良くやっていたその行為は、もはや癖の様な物となっていた。

先程から感じていた震えは、彼女の髪を掻きまわした事で若干収まっている。

クレイは少し照れた様な表情を浮かべ、乱れた髪を手で直そうと撫でつけながら青い瞳を再び外へと向けていた。

大声でなされる報告が終わったのか、何事かを思案する上官の横で、護衛と思われる二人が、何やら言い合っている。表情は見えないが、声の抑揚からして、随分と皮肉が混じった物だった。

その騒ぎを煩わしく思ったのか、上官の男は何事かを尋ねる。部下がそれに答え、少し考える仕草をした男は、大きな声で叫ぶ。

男達はその声に対して短い敬礼をすると、次々と外へと走り出していった。男達が完全に部屋から居なくなると、護衛を伴った上官もその後続く様に部屋の入口へと向かって歩きだす。

一筋の汗が、頬を伝い、床へと落ちる。

外へと向かった男が、ふと立ち止まって振り返ると、こちらに視線を向けた。

「っ……」

その様子に再び表情を凍らせた私の口の中には、声にならない小さな音が響いた。

視線をそらす事が出来ない。

私は震えた手でクレイを抱きしめながら、ただその視線を受け止めた。

しばらくそうして見つめ合っていたが、やがて男は視線を外し、僅かに残る護衛に対して何かを命令する。

敬礼をし、走り去っていく部下を追う様に、その男もまた、部屋の中から出て行った。

どれくらいの時間がたっただろうか、再び大きな揺れが船体を襲い、寄りかかっていた瓦礫がコンソールの上から落ちて、私たちは暗闇から解放された。

瓦礫から這い出した私は、クレイに艦の状況を確認するよう指示を出す。コンソールへ向かい、無数のディスプレイに囲まれたクレイが現在の状況を調べて行く。

周囲には足の踏み場を探す事が困難なほど、散らばった瓦礫が散乱していた。

少しして、クレイが戻ってきた。

「どうだ？ 何かあったか？」

「内部装甲の剥離が目立ちますが、各施設に影響はありません。彼らが強行着陸したドッキングベイは数か所が破損、同時に集積してあったオーデイルより回収したコンテナが数点、持ち出されています」

淡々とした様子で、クレイが状況を報告する。クレイの報告によると、テロスへ向かう途中で船に衝撃が走ったと言う。すぐに艦内を確認し、侵入者を発見した彼女は避難指示を全艦に伝達し、本部要員の避難指示の最中に、同僚を庇い——近くで茫然としていたバイオロイドだろう——気を失ったらしい。

どうやら閉じ込められている間の映像から、彼らは数百人規模の統率された組織で、分散して艦内を探索、有用な物が見つからなかったのか、物資の入ったコンテナを回収して去って行ったようだ。

「……奴らについては何も？」

『該当するデータは有りません』

どうやら、クレイに残った数少ない情報の中には、該当する物は無いようだ。オーデイルから得られた情報も少なくないが、廃船処理の影響で消去された情報はそれを遥かに上回ると言うのだから、やはり廃船処理による情報の消去は、調べると言う点に置いて枷を嵌められたに等しい状況である。

「はあ……情報が根こそぎ削除された管理人格か……落丁した辞書

みたいだな……」

ままならない現状に愚痴をこぼす私に対して、クレイは不愉快そうな視線を向ける。普段、感情の乏しい彼女にしては珍しい事だった。

「マスター。発現の撤回を求めます。私は船舶の航行、運用を行う管理人格であり、情報の収集や分析は得意とする所ではありません」
年相応の拗ねた様な表情で抗議するクレイの姿に微笑ましい感情が芽生え、先程まで感じていた緊張を忘れさせてくれる。

「すまん」

そう言って謝罪した私に対する返答は、そっけない物だった。

「発言に誠意が見られません」

「どうしろって言っんだ……」

「ですから、発言の撤回を求め……っ」

むきになった様に抗議する彼女へと近づいた私は、頭に手を置き撫でる。

突然の行動に言葉を噤んだクレイだったが、やがて大人しくなる。見れば、少しうつ向いた状態で撫でるに任せており、少し拗ねた表情はそのままに照れた様子で顔をそむけている。

「ごめんな。クレイ」

微笑ましい状況に、穏やかな声が出た。

私自身、このような声を出せるとは思っても居なかったが、それはクレイも同じだった様で、照れた表情を固めてしばし沈黙した。

「……申し訳ありません。感情の制御に失敗したようです」

小さな声でそうこぼすクレイに対し、私は小さく笑うと、再びその長い髪を掻きまわしたのだった。

撫でられて乱れた髪を、手で押さえながら、クレイは私を見つめてくる。

少し照れたような、拗ねた様な表情のクレイを眺めていた私は、小さな衝撃を感じて周囲へと視線を巡らせる。

部屋の中は先ほどから何も変わっては居ない。戻ってきたバイオロイド達が瓦礫を片付ける姿が見えるだけである。

「クレイ、他の場所を調べてくれるか？」

先ほどまでの穏やかな空気は吹き飛び、私とクレイの表情には緊張の色が浮かんでいる。あれからまだ時間は経っていない、奴らが再び戻ってきてても不思議は無いのだ。

「艦内に異常は認められません。船外カメラの映像を表示します」

短い指示に対する確な反応を見せたクレイは、艦内を調べ、次に船外カメラの映像をディスプレイに映し出した。先ほどまで浮かべ

ていた年相応の表情は、感情の籠らない無機質な物へと変化している。

映し出された映像には、船外のあらゆる角度から見た風景が無数に浮かび上がっているが、どの画面から何が起こった様な様子は読み取る事が出来なかった。

「何処にも異常は無い様に思うが……何かがぶつかったただけか？」

「この船はシールドによって守られています。断続的に何かがぶつかる事はありません」

そうして私たちが話している間も、鈍い音は何度となく続き、しばらくすると低く唸る様な音と共に、振動が沸きあがってきた。

「妙な振動だな。本当に何もないのか？」

どこか見落としている所が無いかと思い、もう一度表示された船外カメラの映像に目を落とす。

「やはり、どこにも……っ、マスター」

クレイが何かを見つけた様子で、私を呼ぶ。彼女の視線はある映像の一点に向けられていた。

「……どうやらこいつが原因らしい」

「拡大します」

そう言ったクレイは、浮かびあがったディスプレイの一つを指で

なぞる。するとディスプレイはそのサイズを大きくし、また、次の瞬間には、中の映像も拡大されて映っていた。

距離が離れているせいか、若干ノイズが混じるその映像は、しかし、それから何かを判別できるほどには、精密な物だった。

ちょうど船尾の噴射口付近を移したその映像の中には、船体に固定された円筒形の筒の様な物が映し出されており、その口に当たる部分からは、勢い良く赤い光が吹き出している。その近くでは、黒を基調とした薄い色合いの船体が、その光に照らし出されるように浮かび上がっており、内部からは取り付けられた物と同じ形をした機械を抱えた人影が降りてくる。

機械には微弱なシールドが形成されているのか、緑の光に阻まれた円筒形の機械はしかし、淡く青白い光を放つとシールドを打ち消して、吸い込まれる様に船体へとぶつかった。

「何をしているんだ……？」

彼らの行動の意図がつかめない私は、誰ともなく呟いた。

「外見的特徴から推測すると、あれは補助ブースター的一种かと思われます」

「ブースター？」

補助ブースターは、メインエンジンの出力不足を補う為に使用する物で、航行不能な船舶や、大型のデブリ、アステロイド等の移動に用いられている。

確かに、クレイドルはエンジンの故障で動かないが、仮にも襲撃してきた集団がそんな物を使用するとは……

「……まさか、この船をどこかへ運ぶつもりか？」

「船ごとでしたら、物資を持ち出す必要は無いかと思われませんが……」

私の考えた可能性を否定するように、クレイが発言を重ねてくる。

確かに、船ごとどこかへと運ぶつもりなら、中身を態々運び出す必要は無い。それこそ、拠点へと運んでからゆつくりと物色すれば済む事だった。

ならば、何が目的だろうか、この船を動かす先には何がある？

「クレイ、船が向かう航路を調べてくれ」

「了解しました。三次元座標の逆算を行い、航路を算出、周辺状況も併せて確認します」

私は、そう言ってデイスプレイを叩き始めたクレイの後姿を見つめながら、何か言い知れぬ嫌な物を胸の奥に感じていた。

それから幾ばくかの時間が過ぎる。

航路の逆算に時間が掛かっているのか、いまだにクレイはデイスプレイを叩き続けている。補助ブースターを船体に取り付けていた黒い船は既にその姿をくらししており、ただ炎を吹き上げる補助ブースターの影だけが、デイスプレイの中で揺れていた。

『航路逆算完了。結果……です』

そう言いながらクレイがキーを叩くと、私の目の前に、一つのディスプレイが浮かび上がる。ディスプレイには、船の現在地と周辺宙域の星図、そして船の軌跡を示す線が数本描かれている。

それぞれの線には番号と確率が表示されている所を見れば、状況の変化による航路のズレまでもがしっかり計算されているのだろう。

「これは……………、本当に間違い無いのか？」

『はい、念の為、数回に分けて再計算を行いました、その結果に間違いは有りません』

私の目の前に浮かぶそのディスプレイには、高確率で目の前の惑星テロスへと衝突する我々の船の姿が描かれていた。

どうやら、あの連中はこの船を星に落として葬る心算らしい。

「……………参ったな……………」

咄く間にも、船は速度を上げて黄金色に輝く円環を抜け、無数の岩石を弾き飛ばしながら一直線にテロスへと向かう。

私は、諦めにも似た感情を懷きながら、瞬く星を眺める。数多の星が円環の隙間から顔を覗かせ、瞳の中へと飛び込んで来る様であった。

この中に、あの星、地球もあるのだろうか……………。

つい半日ほど前に言葉を交わして分かれた両親の姿が目には浮かぶ。最後に交わした言葉は何だっただろうか？ そう思い、頭に手を当てた私は、両親の言葉を思い出していた。

『何があっても自分を強く持て、良いな？』

父の言葉を思い出した私は、その言葉に違和感を覚えた。

「ん……？ どういう事だ」

何かが引つ掛かる。

あれは成功すれば研究所の別の部屋に送られるだけの実験で、失敗すれば消滅してしまうと言う物だったはずだ。

自分を励ます為の言葉だと思っていたが、もし父や母が今の私の状況を予め知り得ていたとしたら……？ いや、そもそもこの時代に送り込んだのか？

何かある。その可能性に思い至った私の頭は、先ほどまでの諦めの感情は失せ、冷静な思考を始めていた。背筋には嫌な汗が流れている。

何をさせようと言うのかは分からないが、あの両親が理由も無くこんな事をするはずもない。今は生き残り、いつか戻って話を聞こう。来る事が出来たのだ、戻れない道理は無いはずである。

よくよく考えてみればここは移民を目的とした巨大な船の中、例えば惑星内での活動を想定しない造りの船だからといって、突入角度

さえ誤らなければ大気圏に突入した所でどうなるわけでもない。

「クレイ」

私は、クレイを呼ぶ。

「はい、マスター」

「やる事が出来た、手伝ってくれ」

芯の通った、力強い声が口から飛び出した。

その言葉を受けたクレイは、小さな頬笑みを浮かべながらコクリと頷くと、コンソールへと向かう。

「了解しました。マスター、末永くお傍に」

何かを呟いたクレイだったがそれを聞きとる事は出来なかった。伝えなければならない事はしっかり伝えるクレイだ。独り言だろう。

「エンジンの逆噴射は出来ないんだっただか」

まずは現状の確認から行う。大気圏の突入に成功しても、減速に失敗すればどの道終わりだ。不安要素は潰して行こう。

「はい、不可能です」

エンジンはやはりダメな様だ。分かっていた事とは言え現状の厳しさが見えてくる。

「スラスターの推進剤は？」

「残量から見て全力噴射で3分少々です」

輝く星が、前面のガラスを覆い尽くさんばかりに広がっている。あまり時間は無い様だ。推進剤を前面に噴射すれば減速は可能だろうが、その後不時着する姿勢制御が出来ない。

何か無いだろうか……

ふとクレイが表示させていた補助ブースターの映像が目に入る。ブースターは影の中で揺らめいていた。それを見た私は、その一点を見つめ、ある物を発見した。

「マスター？」

急に固まった私の様子にクレイが声を掛ける。

「クレイ」

沈黙を破り、私はクレイに問いかける。

「はい」

「この船が緊急停止をする時、どうやっているか教えてくれ」

「はい、当艦はエンジンユニットを遮蔽物で遮り、推進力を四方、又は前方に偏向して減速を行います」

その返答に私は思わず笑みを浮かべてしまう。

先ほどまで漂っていた岩石の帯は既に遙か後ろに消え、船外カメラの一部に細い線となって浮かんでいる。既に惑星は視界に入りきらないほどに迫っており、大気圏に突入してしまうのは時間の問題と言えた。

補助ブースターが取り付けられているのは船尾のエンジン周辺であるのは既に確認している。そして、この船はエンジンのエネルギーを偏向して前面に向け、減速するタイプの船だ。

そこから考えてやれば……

「いいか？ 合図をしたら、遮蔽装置を作動させてくれ」

「了解しました」

視界の節々が赤く染まる。ガラスは次第に赤く染まっていくが、熱さはやってこない。良く見れば緑の膜が薄く広がり、炎を防いでいる様子が見える。どうやらシールドは、耐熱性能も優秀の様だ。

少し緑掛かった海と、深緑の森が近づいてくる。

「今だ、展開しろ！」

「逆噴射工程、開始。遮蔽ユニット展開」

頃合いを見計らってクレイに叫ぶ、彼女は私が声を発した段階ですでに操作を開始している。流石に艦の運用を一手に引き受ける管理人格に率いられたバイオロイド達の仕事は早い。

船外カメラの映像では船尾に付随する装甲が剥がれ、後部の遮蔽ユニットが迫出して、エンジンユニットを覆い隠す。節々には赤い帯が巻きつく様に揺らめいて見える。

「速力減衰30%」

クレイが突入前と比較した現在の速力を伝えてくる。遥か下に浮かぶ雲の隙間からは、既に海と森の境界線が見えている。

「速力減衰50%」

クレイの声が響く。疑似重力で補うには無理が出てきたのか、振動と音によって五感が痺れるほどの圧力が私に襲いかかるが、その声だけは、確かに私の耳に届いていた。

遮蔽ユニットで速力を減衰させるのはこれが限界だろう。

「スラスター噴射！」

「前部姿勢制御スラスター制動噴射開始」

大気を押し返す様に唸りを上げて吹き出す推進剤によって、船は急激に減速を始めた。浮き上がる様な圧力を感じていた私は、急に床へと引き寄せられる感覚に腕を突っ張って耐える。

既に大気圏は抜け、深い森の中に顔をのぞかせる山々の稜線までもがハッキリと見える様になった。

「速力減衰90%。推進剤切れます」

推進剤の残量が少なくなっているらしい。減速はもう十分だろう。

「前部スラスタ停止！ 微調整して水平を維持しろ！」

船体の上下左右に取り付けられた噴射口からは切れ目なく推進剤が吹き出し、傾いていた船体を徐々に立て直していく。

すでに遠くに見えていた海は山々に遮られて見えなくなっている。艦のすぐ下には大きな森が広がっている。一際高い木が艦の底部を擦り、シールドに弾かれる。

「推進剤ありません」

「船体を地面に押し付けて止めるぞ！」

そうクレイに向かって叫ぶと、コンソールにしがみつく。振動が体を揺さぶり、私やクレイを弾き飛ばそうとする。

既に船底は森の中へと沈み込み、木々をなぎ倒しながら一直線に進む。

「不時着します」

その言葉と共に、船はその巨体を完全に地面へと下ろし、何かが衝突する音とシールドが破れ、船底を擦る嫌な音が響いてくる。警告音と共に、赤いエラー表示が目の前に浮かんでは消えていく。

「……何とか、無事か……」

やがて、船が完全に動きを止めると、私はしがみ付いたコンソール

ルにもたれ掛かる。力が抜け、へたり込む様に腰を下ろした私の元にクレイが歩いてくる。

少しも疲れた様子を見せないクレイに、私は何とも言えない不公平感を懷いたのだった。

序章 間幕 深遠の中で

小惑星を改造した中継基地は、人類が外宇宙に置いて設営する中継基地の中でも最もポピュラーな物であった。

一から宇宙空間に築く必要のある、ステーションタイプの中継基地は、その性質上、膨大な量の資材を必要とする為、限られた物資の運用を行いながら生活しなければならない外宇宙においては、採用する事が困難だったのである。

トレイズ星系より、数光年の位置に設営された、銀河中央方面軍、第34辺境宙域監察隊が拠点とするその中継基地もまた、そんな小惑星を改造して作られた物の一つだった。

「隊長。グランツ隊長」

コンソールが所狭しと並べられた、小さな部屋。中継基地指令室に、声が響く。声の向けられた先には、一段高い位置に設えられたコンソールがあり、そこにはがっしりとした体格に合わせた厳つい髭面の男性が腰を降ろしていた。口には不敵な笑みが浮かんでおり、挑戦的な目でコンソールを見つめている。

「レームよお、いつになったら俺の事を司令って呼んでくれるんだ？」

コンソールから視線を上げたグランツと言う男は、おどけた声を上げる。そのやり取りに慣れているのか、周囲の人間たちは、視線を向ける事すらせずに仕事をこなしていた。

「偉くなっても、隊長は隊長ですからね」

レームと呼ばれた男は、ズレ掛けた眼鏡を指で戻すと、呆れる様な表情で向き直り、わざとらしくため息を零す。

「それに、似合わないんですね、司令って顔じゃないですし」

付けたされた容赦の無い言葉に、グランツは沈黙し、その様子を見た物たちは笑い声を上げる。笑いに包まれた部屋の中で、何が面白いのかニヤ付いた表情をするグランツは、挑戦的な目で周囲を見渡して言った。

「おまえら、独房生活がお気に入りらしいな。この際だ、給料カットも付けといてやろう」

そう、軽薄な口調で言いながら、愉快そうな顔でコンソールを叩くと、あるデータを表示させる。そこには、勤務評価表と記載されていた。

「隊長！ いや、司令！ それは勘弁してください！ いや、ホントに！ ホントに！！」

「司令、マジすんませんでした。調子乗ってました。許して！」

その様子を見た男達は、笑った表情を引きつらせ、次々とその態度を豹変させる。笑いに包まれた部屋は一転、悲鳴に包まれる事となった。そんな様子の中でもレームは態度を変えることなく立ち上がるとグランツのすぐ横まで移動して、小声でささやきかけた。

「隊長のお気に入りの子に話つけておきますから、勘弁して下さい

ませんかね？」

「なに！？」

悲鳴の中でひととき大きな声を上げるグランツ。脈絡の無いその大声に悲鳴は止まり、沈黙が流れる。そんな周囲の様子を歯牙にもかけず、グランツはレームの肩に手を回し、小声で何かをやり取りしている。

話がまとまったのか、立ち上がったグランツは悲鳴を上げ、土下座までしようとしていた男達に向かって上機嫌に話し出す。

「俺は寛大だからな、うん。今回は大目に見てやろう」

軽い口調でグランツはそう告げる。その軽薄な口調からは、処罰する意志が感じられない。一種の冗談だったのだろう。それを受けて立ち上がる男たちもまた、ニヤついた笑みを浮かべて席へと戻っていく。

「ありがとうございます」

そんなグランツや、同僚達の姿に肩をすくめたレームは、芝居がかった態度で一礼する。もはや一つの様式美としてのやり取りだった。

「所で、さっき言いかけたな。なんだ？ 今の話を無かった事につてのは無理だぞ」

再び椅子に腰を下ろした男は、思い出したように尋ねる。先ほどの話を思い出しているのか、口元にはだらしのない笑みが浮かんでいる。

る。

「ああ、救援要請信号ですよ」

「アホか！　そう言うのはとっとと報告しやがれ！」

そっけない態度でそう言ったレームに対し、表情を変えたグランツが怒鳴る。狭い部屋の中で放たれた声は反響し、部屋の空気を揺らす。弛緩した空気は一瞬にして吹き飛び、それに当てられた女性が驚き慌てて書類を落とし、大きな音を立てて床へと散らばった。

そんな重い沈黙の中にあっても、レームの態度はいささかも変化する事は無く、表情の読みにくい顔でグランツを見つめている。

「いえ、緊急性を感じませんでしたので……いいかなと」

「緊急性を感じない救援要請があつてたまるか！　ほら、早くこっちにデータ回せ！」

「了解」

一人怒るグランツの声に、ゆっくりとした足取りでコンソールへ戻るレーム。もはや嫌がらせの様なその行動に、しかし、グランツは青筋を浮かべるにとどまった。

データを受信した音声が流れる。ディスプレイが数枚浮かび上がり、それぞれがデータを表示させていく。最初は怒りの表情を浮かべていたグランツは、データに目を通すにつれて、怪訝な表情を浮かべ、ディスプレイを閉じると難しい顔で腕組みを始めた。

「んー……こりゃあ……信じられんなあ……」

しばらくしてグランツの口から漏れたのは、疑いの言葉だった。しかし、その言葉を聞いたレームもまた、同じ感想なのだろう。特に反抗する事無くその言葉を受け入れる。

「でしょう？ 最前線、それも突端の宙域に数百年前の移民船。まだ敵の欺瞞工作を疑った方が現実的ってもんです」

そう言ってディスプレイを消し、再びグランツへと向き直るレーム。見つめられたグランツはその視線の意味を考え、溜息をこぼす。

「でもなあ、調べない訳にはいかんだろうよ」

「まあ、今までこんなことはありませんでしたしね」

「仕方ないだろうさ、よし、偵察隊を出す。ロイとクーの奴を連れてこい。ああ、直接本人に話して連れてくるんだ。いいな？」

やる事は決まったとばかりに声を上げるグランツ。通信員を呼ぶと、人を呼ぶようにと命令を伝える。

「ハッ！」

ビシッとした敬礼を行った男が部屋から走り出る。先ほどのグランツの悪ふざけでタダ働きになりそうだった男の一人である。

「二つも出すんですか、一つで足りるでしょうに……」

「保険だよ、保険。最前線だぞ？ 備えはしとくもんだ」

小さな驚きを示してグランツに迫るレーム。しかし答えたグランツは表情を変えずにコンソールを眺めている。

しばらく二人がそうして話していると、部屋の扉が叩かれて、先ほどの男に連れられた一組の男女が部屋の中へ入ってくる。二人はグランツの前まで歩くと綺麗な敬礼を行った。

「ロイド」エレイド少尉、ならびにクー「リヤンフェイ准尉、参りました」

答礼を返したグランツだったが、その話す言葉は軽い物だった。

「お、良く来た御兩人、ちょっと前線まで見物に行ってくれや」

「軽いですね、隊長……」

軽薄な物言いに苦笑を浮かべるロイドが苦言を表す。クーに至っては無言を貫いている。しかし、グランツはそんな二人の様子をあえて無視して二人の前にディスプレイを表示させる。

「良いんだよ、俺はこれで。ほい、資料だ」

資料に目を通した二人は揃って可思議そうな、それでいて緊張した様な表情を浮かべた。

「ガイドビーコンからの情報回収……こりゃまた」

元々、ガイドビーコン自体が情報を発信する仕組みである為、態々接触しなくとも、情報を得る事は出来る。そうであるにも拘らず、

わざわざ現地に出向いてそれを回収するなどと言う事は、余りいい話ではない。

少し擦れた声でロイドは零す。嫌な顔を浮かべている所から見れば余り気が進まないのだろう。

「ああ、スカウトキャリアーを二つ出す、それぞれ指揮を取れ」

「了解しました」

グランツの言葉にロイドが敬礼をして去ろうとするが、クーが何も反応を見せていない事に気づいて歩みを止める。その様子はグランツも気が付いたのだろう、いやらしい笑みを浮かべて、からかうように声を掛ける。

「んー？クーちゃんよ、どうした、だんまりして。あーさてはコレとの良い所を邪魔しちまったか？ 悪いな」

「あーうつさい、このセクハラ野郎！ クー＝リャンフェイ、任務了解！」

小指を立て、挑発する様に話すグランツにハツとした表情となったクーは、頭を掻くとグランツをにらみつけ、乱暴な敬礼をして部屋を出て行った。

「あらまあ、振られちゃった」

「からかうからですよ。もうちょっと彼女の気持ちも考えてやっただろうです？」

さして残念そうでも無い様子でおどけるグランツと、それをたしなめるロイドの間に、微妙な沈黙が漂っている。その沈黙に耐えられなかったのか、グランツはおどけた口調はそのままに、ロイドに向かつて笑う。

「ハッハッハ、気持ちだ？ 俺あ部下の事を蔑にした事は無いはずだが、……給料は下げるけど」

「はあ、知らぬは本人だけって事ですな」

笑顔を向けられたロイドは、小さな言葉をこぼす。

「ん？」

「いえ、ロイド」エレイド、任務了解。早速行ってきます」

聞こえなかったのか、聞き直そうとしたグランツに向けて、話を打ち切る様に敬礼をすると、ロイドは部屋の出口へ向かつて歩き出す。彼が部屋を出ようとした時、グランツから声が掛かる。その声は先ほどまでと違って真剣な響きを帯びていた。

「気をつけてな。どうにもキナ臭え」

「キナ臭いのは、ここ数十年変わって無いでしょうに」

そう苦笑したロイドは改めて部屋を出る。

「今までとはなんかが、違うんだよなあ……」

後に残されたグランツは、深く大きなため息をつく、しばらく

の間、彼らが出て行った扉を眺めていた。

第一話 この星の上で

照明が落ち、耐衝撃シャッターが窓を覆った指揮所の中で、私はコンソールに備え付けられた椅子に腰を降ろしていた。

船の健在を知らせる機器の駆動音は止まり、異常を知らせる非常灯が赤く点滅を繰り返している。部屋の至る所で断ち切られた電気配線から漏れるスパークの光と、降り注ぐ火花が、薄暗い室内を明るく彩り、船外カメラもまた衝撃によって壊れたのだろつ、目の前のディスプレイには黒くノイズの混じった画面が広がるばかりである。

「……クレイ、船の被害を調べてくれないか」

「はい、マスター」

私の声を受けたクレイが、コンソールへ向かう。

光を失い、死んだように沈黙する機械にクレイの指が触れる。

すると、先程までの沈黙が嘘だったかの様に、コンソールは光を灯し、次々とディスプレイを浮かび上がらせた。引き延ばされ、巨大な画面を晒す一枚のディスプレイには、船のシルエットと思しき物が映し出されていた。全面が灰色だったそれは、彼女がキーを叩く音と共に徐々に赤く塗りつぶされていく。

やがて、操作を終えたクレイの前には、赤と数少ない黄色の光に塗りつぶされたディスプレイが残った。

クレイが手をかざし空間を切る様に振り抜くと、巨大な画面は彼女の腕に納まる程の大きさになった。それを掌の間に浮かべたまま、クレイはこちらにやってくる。

「…… 人員に対する被害こそ軽微であった物の、不時着時の衝撃によって船底部は軒並み壊滅。メインエンジンにも深刻な被害が発生しています」

ノイズの混じる映像を横に追いやり、渡されたディスプレイを眺める。そこに表示された内容と、淡々と続くクレイの報告によって、私は不時着時の衝撃が思った以上に凄まじい物であった事を、改めて知るのだった。

至る所で配線が切断され、内部装甲の剥離によって艦内の至る所が傷ついていた。強固な作りになっている中枢部を除いた、ほぼすべてのブロックに渡って被害が及んでいるのだ。特に、不時着時の衝撃をともに受けた船底部の各設備は軒並み全壊し、復旧の目途も立っていない。

頭を抱えなくなる様な状況ではあったが、幸いにも死者は無く、殆どの者が無傷であった。襲撃の際に出された避難命令によって、ほぼ全ての者が中枢部の避難指定区域に留まっていたからである。

「残念ですが、メインエンジンの破損によって惑星テロスの重力圏から脱出する事が不可能となりました」

「それは修理不可能な程…… だろうな……」

惑星からの脱出が不可能となった。説明を締め括る様にそう告げるクレイの言葉を受けて、思わず聞き返した私だったが、その言葉

の語尾は小さく消えた。彼女の視線とその仕草で、望みが断たれた事を悟ったからであった。

「そうか……何か別の方法を考えるしか無いな」

私は絞り出す様な小さな声と共に、大きな溜息を吐きだした。沈黙が広がり、指揮所の中にはバチバチと爆ぜる紫電光と、音だけが響いている。

どれくらいそうしていただろうか、長い沈黙を破ってクレイが声を上げた。

「……………船体ユニットを流用した拠点を構築しては如何でしょうか？」

「……ん？ 何も態々拠点なんか造らなくても、ここを拠点にすれば良いんじゃないか？ 資源なら専用のユニットを配置するだけで良いんだろう？」

拠点を造る事を提案するクレイに、私は疑問をぶつけてみた。その言葉は、力の無い酷く投げやりな物だった。

確かに拠点は必要だが、別の場所に拠点を造らずとも、船をそのまま利用すれば良いだけの話である。資源の回収についても専用の設備を展開させるだけで済む、と言うのだから時間を掛ける必要も無いだろう。

「確かに、生活空間として利用し、資源の回収を行うだけならば現状でも問題ありません」

私の疑問をそのまま肯定する様に、クレイは頷き、賛同して見せた。その言動を怪訝に思った私は更に言葉を重ねる。

「ならどうして？」

「マスターの目的を達する為には、この星から脱出しなければなりません。ですが船体は重く、エンジンはそれを持ち上げる出力を持ちません」

「何を今になって解りきつた事を……船体が重いなら軽くすれば良いだろう、……なるほど、そういうことが」

解りきつた事を述べるクレイに、反論しようと声を上げた私は、自らの言葉によって彼女の言いたい事を悟った。

「はい、健在な船体ユニットを切り離して拠点設営に流用し、修理不能な物は分解して資源として利用します。船底部のユニットや損壊した中枢部の解体もしなければならぬ為、時間はかかりますが現状維持よりは建設的かと」

「確かに、ユニットを切り離せば船体は軽くなる。修理可能なエンジンだけでも何とかなるかもしれないな」

この船はユニット工法を用いて建造されている。

完全に破壊されたユニットや中枢部の一画であるメインエンジンの解体には手間取るだろうが、エンジンは一基だけでは無い。今回は簡単に船の規模を変える事ができる構造に助けられたと言う所だろうか。

そう、納得する様に頷く私を見つめながら、クレイは一步前に進み出た。

「ユニットの解体と、設営に関する指揮は私が行います」

移民船であるクレイドル号は、惑星移住に際してはその船体ユニットを解体し、開拓の拠点として利用される事になっている。そんな性質を持つ船の、管理人格を任される思考型バイオロイドの彼女にとって、それは本来行うべき業務の一環と言えた。

「わかった。私は何をすれば良い？」

元々が駆け足で上級船員教育を受けただけにわか船員の私には否応も無い。

しかし、そうすると私の仕事が無くなってしまふ。流石にこの状況で、彼女に全てを任せて寛げる訳も無く、何か出来る事は無いかと尋ねてみる。

「マスターには、拠点設営に使用する土地の確保をお願いします。ある程度広く、拓けた場所であれば問題ありません」

尋ねられたクレイの口からは、用意してあった様な淀みない答えが返ってきた。

確かに、拠点の構築をするのならそれは重要な仕事である。建物を建設する時にしっかりとした地盤の土地を選ぶ様に、土地の特性や性質と言う物は拠点設営に大きく関わって来る。ましてや何が起これとも知れない未知の惑星の上である。用心に用心を重ねるに越した事は無い。

しかし、広くしっかりとした地盤を持ち、埋蔵資源の豊富な土地は、闇雲に探して見つかる様な物ではない。さらに言えば、ここは先程不時着したばかりの未知の惑星である。詳細な情報も無く、どうやって探索を進めれば良いのだろうか。

「それは良いんだが、どうやって探せば良いんだ？」

「こちらをご覧ください」

私の疑問を受けてクレイがディスプレイに表示した物は、一枚の地図だった。

覗きこむように身を乗り出した私が、それを視界に映すよりも前に、地図の描かれたディスプレイはクレイの手を離れ、床に落ちる。掌に納まる程の大きさしか無かったそれは、床に落ちるとすぐに縦横に伸び、私の座るコンソールの前に広がった。

山々の稜線までもが描き出されているそれは、地表を直接切り取って持ってきたかの様な、錯覚を懐かせるに十分な程、精巧な物だった。

「これは？」

「不時着前に撮影した周囲200kmの地形図です。マスターには、こちらが選んだ候補地を回り、実際に設営が可能なのかを確認していただきます」

既に地形図の上にはいくつかの場所に丸が付けられ、その場所に関する情報が表示されている。なるほど、これが候補地と言う事だ

ろ。確かに、ある程度の広さがある開けた場所が優先的に選ばれている。

「……これなら何とかなるか」

墜落時のあの状況で落下地点周辺の地形を調査する等、並大抵のことでは無かっただろうが今は、あの状況でそこまで気をまわして処理を行っていたクレイを褒めるべきだろう。

私は感謝の気持ちを込めて、横に立つクレイの頭を撫でる。照れくさいので言葉には出さないが……

いくらバイオロイドだの管理人格だのと言われても、私には彼女の事が年の離れた妹にしか見えない。普段は彼女の様子から、そうと扱う事はしないのだが、まあ、褒める時くらいは良いだろう。

やはり、幾度か見せてくれた通り、クレイは感情を持たない訳ではない様だ。一目には分からない程だが、照れくさそうにはにかみながら、撫でられるに任せている。

「……ドッキングベイに歩行探査機を随員と共に配置しておりますので、そちらを利用して下さい」

頭から退けられた手を視線で追いながら、照れた表情はそのままに、クレイはそう言ってリストの表示されたディスプレイをこちらに展開させる。

「歩行探査機？」

聞き慣れない言葉に私は疑問を返す。

ドッキングベイと言うのは恐らくオーデイルの探査機が帰還した際に訪れたあの場所だろうが、あそこに歩行探査機と呼べそうな物は無かったはずである。

「不整地踏破性を重視した探査機です。詳しい情報は端末にデータを転送しましたのでそちらをご覧ください」

そう言つてクレイが携帯端末を操作すると、私の端末にデータが送られてきた。見る限りでは六足歩行の昆虫を彷彿とさせる構造をした探査機の様だ。

「わかった、後で目を通しておく」

詳しい情報は後で確認する事にした私は、調査の段取りについてクレイに尋ねた。どの様な支援が受けられ、また、現地でどの様な調査を行えば良いのかが分からないからだ。

「手筈ですが、まず探査機を随員と共に空路で輸送し、候補地上空で切り離します。その後は現地に展開し、地質や資源分布、植生状況など、基本的な探査活動を行います」

クレイの示した調査内容は、色々な学者仲間が行うフィールドワークに駆り出された私ならば問題無くこなすことができる物だった。

しかし、複数の候補地があると言う事は、設営条件に適した場所が見つからなければ次の候補地を目指すと言う事だろう。

「仮に、その土地が使えない場合はどうする？」

「探査の結果、設営に適さないことが判明した場合は、次の候補地へ向かっていただきます。しかし……」

私の問いかけに、クレイは言い淀んだ様子を見せた。

大方、先程の損害報告に上がっていた、ある設備の稼働停止辺りを気にしているのだろう。最も、後で知った事だが、クレイ自身は設備の停止よりも、それによって私に最良の環境を提供できない事を気にしていた様である。

「輸送機は出ないんだろう？ 損害報告で燃料生産設備が稼働停止に陥ったのは知っている。つまり、最初だけは空路で移動し、次からは歩いて候補地へ向かうと言うことだな」

「申し訳ありません」

私の言葉に、クレイは申し訳なさそうに頭を下げる。そんな様子の彼女に頭を上げさせた私は、瑣末な問題だとも言つかの様に笑って返す。

「いや、フィールドワークの延長と考えれば何のことは無いさ。まあ、未知の惑星でそれをする事になるとは思わなかったが……」

そんな私の様子に、ゆつくりと頷いて見せたクレイは、元の調子を取り戻した様に話を続ける。まだ少し気にしているのか、時折こちらを気遣う様な目線を向けている。

「調査が終わりましたら、設営資材の輸送を行います。マスターはその便に乗って帰還して頂きますので、そのままお待ちください」

「わかった」

聞きたい事を全て聞き終えた私は、床を蹴って立ち上がり、ドッキングベイへと繋がる通路に向けて歩き出た。扉が開き、踏み出した私の眼前には、薄暗い非常灯に照らされた廊下が広がっている。

扉を潜ろうとした私の背後から、声が掛かる。少しうるたえた響きを含んだクレイの声だった。

「マスター、今から出発されるおつもりですか？」

「急ぐんだろう？　なら早いほうが良いじゃないか」

なぜその様な声を出すのか分からないまま、善は急げとばかりに扉を抜けようとする私を、引きとめる様にクレイは続ける。

「夜間行動は危険が大きすぎます。夜明けを待つて出発されるべきでは……？」

クレイの言葉に私は彼女を振りかえる。確か、私が揺れる船の様に飛び起きたのが朝だったはずだ。墜落してからもそれほど時間は経っていない。

「夜？　私が起きてからそれほど時間は経ってなかったと思ったんだが……」

そう言いながら私は手に嵌めた端末の時計を確認する。地球時間の午後2時丁度であった。昼食にするには少し遅いが、夜と呼べるほどに遅くは無い。

「先ほど日が没しました。惑星上の時間が地球標準時からずれている為にそう感じるのでしょうか。このポイントの時間は現在午後7時、地球標準時より5時間のズレです。ご覧下さい、月が綺麗ですよ」

そう、小さく微笑みながら、クレイは指揮所の窓を覆う耐衝撃シヤッターを解除する。徐々に関くシヤッターの隙間からは眩い月明かりが射しこみ、部屋の中を照らし出して行く。

日没と同時に顔を覗かせたにしては随分と高い位置にある月は、地球から見たその十数倍はあろうかと言うほどに、巨大な物だった。薄らと赤みを帯びた月の巨体の前には、宇宙で見た岩の円環が横切っており、さながら赤い星を横断する金色の大河の様である。

「……流石に、これを見せられて疑う訳には行かないな。確かに、綺麗だ」

室内に戻った私は、視線を空に浮かぶ月に向けたまま、言葉を返す。どうやらクレイも同じ様に月を見上げているらしく、小さな返事が帰ってきただけであつた。

穏やかに流れる雲の隙間から差し込んだ月明かりが光の帯となつて森を照らし出し、寝静まつた動物たちを暖かく包み込む。

船体に反射した鈍い光と、直接差し込む赤みを帯びた光に照らされる指揮所の中で、しばらくの間、私達は言葉を発する事も無く、輝く月を眺めていたのだつた。

第二話 一夜明けて

眠っていた私は、鳴り響く音によって目を覚ました。緊急時を告げるけたたましいアラームとは違う、誰かが尋ねてきた時に鳴らす呼び鈴の様な、涼やかな音色であった。

薄く目を開くと、落ち着いた色合いの壁と、それに合わせた調度品が並ぶ部屋が目に入る。その部屋、艦長室にはゆったりとした時間が流れていた。

私は手を伸ばして枕元に転がる端末を掴み、画面に触れる。すると先ほどまで聞こえていた音が途絶え、画面が変化する。

『おはようございます。マスター』

端末の奏でる音はまさしく呼び出し音だった様だ。端末の側面に小さく口を開けたスピーカーからは、落ち着いた色を持ったクレイの声が聞こえてくる。

「ああ、クレイ、おはよう」

熟睡していたおかげで昨日からの緊張が取れたのか、穏やかな声が出た。

『朝食をお持ちいたします。少々お待ち下さい』

私の声に釣られてか、柔らかい声でそう言った後に通信は切れた。端末の画面が色を失った事を確認した私は、勢い良く立ち上がる。僅かに感じる眩暈に体をふら付かせながら室内を歩いた私は、壁に

備え付けられたコンソールに触れた。

遮光状態に設定されていた窓の濁りが消え、外の景色が見えるようになった。視界の先には、一面を覆い尽くす空と大地が広がり。天頂には陽の光を浴びた円環が、空に溶ける様に薄い輝きを放っている。

——視界を横切る影。

思わず身を引き、目を閉じた私が、再びその目を開くと、窓の向こうには見たことも無い鳥が飛んでいた。

私は、遠くに見える山々の稜線を、なぞる様に舞う鳥たちの姿を眺めながら、この星——惑星テロスで最初の朝を迎えた。

.....

.....

.....

.....

しばらく景色を楽しんでいると、扉の開く音と共にクレイが姿を見せた。その手に朝食が載せられたトレイを持っている。

テーブルの上に静かに並べられる朝食を見ながら、私は問いかけた。

「クレイは食べないのか？」

「ご心配には及びません。私たちバイオロイドに食事は不要です」

問いかけられた彼女は、怪訝な表情を浮かべながら言葉を返す。

この船の活動を支える彼女らバイオロイドは、その生体維持に必要なエネルギーを栄養薬品で補っている。感情制御によって空腹から開放された彼女たちにとって、食事と言う物は生体維持を効率よく行うための活動でしかないからだ。

「だが、食べることはできるんだろう？」

「はい、可能です」

頷き、肯定するクレイ。

「できるなら、一緒に食べないか？」

そう言っただけで私は、立ったままの彼女に対して、椅子に座るよう促した。誘いを受けた当の本人は困惑した様子で、椅子と私を交互に見比べている。

「しかし……よろしいのでしょうか？」

逡巡したクレイの口から出た言葉は、快諾でも拒絶でもなく、ただ躊躇する響きをまといていた。

「良いも何も無いさ、一人じゃ味気ないだろう？ それに、上じや誘えなかったからな」

私はそう言っただけで視線を天井に向けながら、笑いかける。

事実、空の上では色々な事がありすぎたせいか、落ち着いて食事

をしている暇も無かった。

もちろん今が落ち着いている訳ではないが、地に足が着くという、ただそれだけの事で随分と気持ちに余裕が持てる事を、私は実感していた。

「……了解しました」

視線を交わし、無言で見つめ合っていた私達だったが、溜息と共に了承の言葉を吐きだしたクレイによってそれは終わる。椅子を後ろへと引き、静かに腰を降ろしたクレイは、ジッと私を見つめていた。

「……これは命令じゃなくてお願いなんだし、そういう時は分かりました、かな」

「はい……わかりました。マスター」

「うん」

そう言っただけで微笑むクレイの態度に、満足げに頷いた私は手にした端末から給仕担当を呼び出した。

私の朝食はクレイが用意したと言うが、当然給仕を担当する者は別にいる。船員食堂や商業区の飲食店のスタッフとして働いているバイオロイド達である。

短い返答で応答した給仕の男性にクレイの為の食事を頼み、通信を切る。

しばらくたち、入室を告げるアラームと共に、扉が開かれ配膳台を押した男性が入ってきた。白い制服の上からエプロンを身につけ、頭にはエプロンと対になった清潔そうな帽子を被っている。私の視線に気がついたのか、軽くこちらに会釈を行った男性は、丁寧な動作で料理を並べていく。そのどれもが、作られたばかりの物だった。

食卓を囲み、会話に花を咲かせながら食べる料理は、とても美味しく、どこか懐かしい情景を私に思い出させてくれた。

.....

.....

.....

.....

「まもなく投下地点に到着します」

暗く、狭い空間に声が響く。周囲に光は無く、ただ人の動く気配のみがそこに在った。

声を受けた私は、静かに頷いて目を開き、端末の通信回線を入れた。

「よし、行こうか……全機起動」

静かな言葉の後に残る沈黙——、その沈黙を破る様に、身を揺るがす振動と何かが動く断続的な音が私の耳に届いた。

闇に包まれていた空間には機械の放つ小さな光が無数に灯り、眼前の投影モニターには光を取り込んだメインカメラから送られる、機外の映像が表示される。

薄らと見える赤い光に、金属で出来た堅牢な壁。歩行探査機を搭載した輸送機の内壁の一部だった。

「投下地点まで残り5000」

感情を含まない落ち着いた声が、投影モニターの下——指揮官席より一段下がった所に設けられた管制席——より発せられた。

現在隊伍を形成する歩行探査機のそれよりも、一回り大きな体軀を誇る指揮官機。

その指揮官機に設けられた中隊司令部がそこにあつた。機体を操作する単機能型バイオロイドとは違う、準高度AIを備えた個体が、そこには詰めていた。

「全探査機の起動を確認。雛鳥から親鳥へ。ハッチ解放、及び安全装置の解除を要請する」

『こちら親鳥。要請を受理する』

ガコンと言う何かが外れる音と共に、機体が大きく揺れた。左右にゆっくりと振られる様な揺れを感じる。

内壁を映していた投影モニターには、一筋の光が差し込み、やがてそれは暗い部屋を明るく照らし出した。我々を運ぶ輸送機の、下部ハッチが開いたのだ。モニターに広がる鈍色の壁の先端には、雲間から覗く、深緑の森が広がっていた。

ふと浮き上がる様な感覚を覚える。輸送機が、探査機を投下する

為に高度を下げ始めた証拠であつた。

「投下地点まで残り3000」

目標地点までの距離を告げる声。投影モニターの片隅にはクレイから貰った物と同じ、目標地点が描かれた地図が表示されている。時折動くバイオロイドの影が投影モニターに染みの様な跡を残し、再び描画される映像によって消えて行く。

「各機、機体のチェックを開始」

管制席からの声が響き、それに反応したくぐもった声が後に続く。不明瞭な言葉は、通信機を介しているからだろう。

歩行探査機が形成する小隊、彼らの指揮官機から隊が正常に機能している事を示す通信が返された。

その言葉を聞いた伝声官の男は、こちらに向かって小さく頷いた。高度を落とした輸送機は既に雲を抜け、映像には地上の木々が鮮明に映し出されている。

「投下地点まで残り1000」

木々が途切れ、広い丘陵が視界に映る。巨大な岩が所々に点在するなだらかな斜面では、そこに生える草花が、風を受けて波打つようになびいていた。

『カウントを開始する』

伝声官の言葉を受けた、輸送機のオペレータの声がスピーカーか

ら響き、ゆつくりとカウントダウンを開始する。

『……………5……………4……………3……………2……………1……………投下』

赤く灯っていた信号が青に変わり、小さな振動と共に探査機は切り離された。

重力に引かれ、瞬く間にその巨体を地上に向けて降下させて行く歩行探査機。メインカメラに映る蒼穹の空には僚機の姿があった。そのどれもが風を切る音を轟かせ、細い雲を引いている。

風を切る音を響かせながら大地へと向かって突き進む探査機の群れ。機体は地上へと近づくとつれてその速度を上げ、座席に座る私の体を容赦なく持ちあげに掛かる。

やがて、眼下に広がる丘陵の終わりが見えてきた。このまま行けば森に突っ込んでしまう。いくら堅牢な作りをした歩行探査機とはいえ、この速度で木々の中に突っ込んでしまえば、無事でいられるはずもない。

だが、そうはならなかった。

「サスペンションブースター、点火」

甲高い音が響き、それに続いて轟音が周囲にまき散らされた。丘陵を覆う草木は噴きつけられる灼熱の炎に焼かれて黒く焼け焦げ、吹き飛ばされた土塊が周囲へと飛び散っていく。

浮き上がる様な感覚から一転、床に押し付けられる程の衝撃を受けた私は、足をつ張り、シートに体を預けてその衝撃をやり過

す。

急な制動を受けた巨体が、投下によって与えられた慣性力を一息に殺し、一瞬浮き上がったかと思うと、大きく広がる足を伸ばして大地へと降りたった。

殺し切れなかった速度によって、地面を抉りながら突き進んだ巨体はやがて止まり、シリンダーを動かす空気の排気音が風の音を切り裂いて響く。

大きな振動が機体を揺らし、斜めになったその姿勢を戻す頃、周囲の至る所で同じ様な轟音が響き渡る。

轟音が止み、周囲に風の奏でる音が戻る頃には、緑の草木が風にたなびく雄大な丘陵の姿は無く、抉れ、捲り上がった土塊と、白煙を上げて燃える黒い草花が散見される無残な姿が広がっていた。

「強行着陸完了……全隊、状況知らせ」

伝達官が回線を開き、全体に向けた通信を行った。手元に表示したディスプレイには各小隊の健在を伝えるステータスリストが表示されている。

『第1小隊、全機健在』

『第3小隊異常なし』

『第2小隊、4番機が転倒。脚部数か所に損傷あり。いずれも軽微』

強行着陸中の演算処理に割かれていたりソースが、元通りに通信

へと振り分けられると、表示されたステータスリストの更新が行われる。

どうやら着陸地点が悪かった為に、足を取られて転倒した機体があるようだ。すぐさま中隊本部要員が作戦行動の修正を行い、伝達官が指示を飛ばし始める。

「第2小隊は4番機の分隊を残して行動を開始、第1、第3小隊は所定の計画に従い行動を開始せよ」

丘陵の各地に降りたった歩行探査機は、伝達官の指示に対して了承の返信を行うと、僚機と合流しては森に分け入っていく。

木々をなぎ倒す音が響き、逃げ惑う動物の声が耳に届く。視界には、住処を奪われて一斉に飛び立った鳥達の黒い影が映っている。

「各坐した4番機の直近につけてくれ」

「了解しました」

椅子から浮かび上がる様な断続的な振動を伴って、私の搭乗する歩行探査機は進む。転倒して身動きが取れなくなっていた4番機は既に姿勢を元に戻し、損傷個所の修理に入っていた。

近くには僚機である第2小隊の3番機が静かに佇んでいる。

「ここに仮設司令部を設ける。各隊は所定の調査を終え次第ここに集合。全機の集合を待つて次の拠点へと移動を開始する」

私の指示は伝達官によって全隊に伝えられ、操縦席に座った男は

歩行探査機の足を器用に折りたたみ始めた。地上では2機の探査機より降ろされた隊員達が忙しく動き回り、何かを作り始めている。

惑星上の地形を気にすることなく縦横に動き回る事のできる歩行探査機は、その一部を指揮所として使用できる様に改造されていた。所謂、指揮官機がそれに該当する。

（候補地は全部で5か所、どれかが当たってくれていれば良いが……ふむ、つい数日前まではただの研究員だったんだがな……）

ふと脳の片隅をかすめた感情に、思考を止めた私は僅か数日前に思いを馳せる。研究をしている時にしか自覚した事の無い感情——充実感とでも言えば良いのだろうか——に私は一人笑みを浮かべる。

地にその機体を横たえ、アンカーによって地面へと固定された指揮官機の中で私は、作戦行動を遂行する部下を示すアイコンを眺めながら、ひとり思考の海へと潜って行った。

第三話 川辺の戦い

草木が鬱蒼と生い茂る森の中を探査機は進んでいた。

朝露に濡れ、ぬかるんだ地面をその足が蹴る度に、地鳴りにも似た振動が木々を揺らし、それによって差し込む木漏れ日だけが、薄暗い森を照らし出していた。

駆動脚が沈み、付着した土が巻き上げられるように飛び散り、時折擦れる木の葉はガサガサと騒がしい音を立てては、無数の葉を周囲へとまき散らしている。

「ここが最後……か」

正面に広がるメインカメラの映像の放つ光を見つめながら、私は合図を送る。探査機を超える巨木が立ち並ぶ森の中に、ぽっかりと口を開けた広場。そこがクレイの指定した、拠点候補地の最後の一つであった。広場の各所で、先行した部隊が既に周囲を調べ始めている。

「第2小隊、全機停止」

伝達官が命令を伝え、それと同時に操縦席の男が探査機を停止させる。小さく響く駆動脚の残響音が静かな森に溶ける様に消え、鳥や虫の奏でる音色が戻って来た。

メインカメラの片隅では、指揮下にある探査機から無数の人影が吐きだされては、詰み込まれた荷物を運び出している。ごく一般的な単機能型バイオロイドである彼らには勿論名前などは無い。ある

物と言えば、命令を遂行する作られた意志と、最低限の思考能力だけであった。

探査機が足を折りたたみ地面に降りると、機外へと続くハッチが開く。薄暗い指揮所の中に、自然の光が入り込んできた。

タラップを下り、大地へと降り立つ私の後ろには、二人の護衛が続いていた。金属部品で補強された装甲服と腰に下げた凝集光銃の擦れる音が規則正しく響いている。

ふと視線を横に向けると、先程の運び出された資材が組み立てられている。アンカーによって固定された台座の上に、金属製の構造物が次々に取り付けられていく。それは高さ数メートルの金属製の塔の様な物だった。

「通信中継塔の設置が完了しました」

足を止め、その様子を眺めていた私の横合いから声が掛かる。後ろに続く護衛と同じ装甲服を身に纏った顔の見えない男だった。敬礼によって強調された左胸に輝くシンボルから、彼が私の周りに居る部隊、第二小隊を率いる小隊長である事が読み取れる。

単機能型バイオロイドとして一括りにされる彼らだったが、全員が同じ能力を有している訳では無かった。生まれた時には最低限の基本性能しか与えられない彼らは、それぞれが役割を全うする為に必要な知識を直接生体脳へとインストールされる。私の目の前で、直立不動の敬礼を捧げる男もまた、指揮官として必要な知識を与えられた単機能型バイオロイドであった。

「わかった。君の隊はそのまま探索活動に合流してくれ」

「了解しました」

敬礼を続ける男に軽く頷いて答礼を返した私は、立ち去る彼の背中を見つめ、クレイが詰める母艦への通信回線を開いた。数回繰り返し返された呼び出し音の切れる音と共に、小さく表示された立体映像には、微笑みを湛えた彼女の姿があった。

『お疲れ様です。マスター』

数日前に通信を行ったはずの彼女の姿が、ひどく懐かしく見える。

我々が輸送機より投下されてから三週間、クレイドルの通信可能圏内を抜けてから、実に数日の時が経過している。既に回り終えた他の候補地は周辺探査の活動拠点として利用される事になり、惑星の様々な観測データを手に入れる為に、急ピッチで準備が進められている。

「どうだ？ 立地としては悪くないと思うが……」

挨拶もそこそこに、私は尋ねた。

地図でみた広場は、北部を横断する山脈地帯から伸びた山々に東西を挟まれた広い盆地の様な場所で、広場のすぐ近くには山脈から注ぐ川が流れ、少し下った所には湖があった。周囲を覆う森林地帯は巨大な針葉樹林がその大多数を占め、地球では当の昔に失われた、原初の風景を見せてくれている。

そんな針葉樹林に囲まれた広場も、クレイドルの各施設を展開させるに十分な広さを持っていた。唯一の懸念である鉱物資源も、山

岳地帯に埋まる手付かずの鉱脈から無尽蔵に供給されるだろう。

そんな私の予想を肯定する様に、クレイは頷き、言葉を続ける。

『確かに、マスターのおっしゃる通り、立地条件は理想的です。』

『少々お待ち下さい』

反応しようとした私を視線で押しとどめた彼女は、待つように告げて、手元のディスプレイを手繰り寄せた。恐らく調査結果をまとめた物だろう。じっくりとそれに通したクレイは、しばし沈黙してから、その表情を緩めた。

『事前の予測結果以上に優れた土地です。すぐに設営準備に取り掛かりましょう。マスターは例の施設を展開してください』

「わかった」

通信を切った私は、背後に控える護衛の男に向き直って指示を伝える。

敬礼をして踵を返した男が、私達の降りてきた探査機へと駆け込むと、しばらくしてその巨体は身を起こし、広場の外へと歩いて行った。

私が男に与えた命令。それは、やがて目に見える形で姿を現した。広場の周囲に、等間隔で立てられた十数メートルの塔。木々の隙間から垣間見える螺旋の描かれた円筒形の構造体は、その先端に無数のアンテナの様な物が取り付けられている。

ふと、小さな振動が地面を揺らし始めた事に気が付いた。そびえ

る様に立っていた円筒形の構造体が回転を始め、ゆっくり地面へと飲み込まれて行ったのだ。

柱が木々に遮られ、完全に視界から消え失せると、大きな炸裂音がこだまし、八本の薄い緑色の柱が天高く立ち上った。まっすぐに伸びる光の柱は、やがて角度を変え、互いがぶつかり合う様に、中央へ向かって倒れて行く。

光が重なり、一際大きな輝きを放つと、そこには元の風景があった。先程までの眩い光の痕跡は跡形もない。

光学シールド。擬装を目的として構築されるこのシールドは、内部の視覚情報を遮断、擬装する特殊なシールドで、クレイドルが全盛だった時代から野戦陣地の構築等に欠かせない物となっていた。

そんなシールドが展開する様子を、驚きながら眺めていると、クレイから通信が入ってきた。

『光学シールドの展開を確認しました。……どうか致しましたか？』

驚いた表情をそのままにした私を怪訝に思ったのか、クレイが探る様に問いかけてきた。

「いや、こんなに派手だとは思わなくてな」

そんな問いかけに、私は素直な言葉を返す。

無理も無い、事前に見せられていた資料映像にはこの様な派手な演出は含まれておらず、展開する薄緑の膜の様な物しか映っていなかったのだから。

『高出力型ですから致し方ありません』

彼女の説明によると、シールドにも多彩な種類がある様で、今回使用されたのは重要施設の擬装に用いられる高出力型シールド発生装置だったらしい。光学的なシールドである為、侵入を防ぐ事はできず、実弾兵装に対する防御力も皆無だが、光学兵器については例外で、鉄壁の守りを見せると言う。

『マスター、間もなく第一便がそちらに向かいます。それに乗ってお戻りください』

「ああ、わかった……ん？」

説明を終えた彼女の言葉に、私は返事を返して通信を切ろうとした。しかし周囲の探索に当たっていたバイオロイドからの通信が割り込んできた事で、それは中断される。

「報告。エリア03において複数の生体反応を感知。河川に沿って北上している模様」

「……そうか、分かった。クレイ、どうやら戻るのは少し後になりそうだ」

それを聞いた私は、しばし考え、端末から先程の報告に関する資料を呼び出した。詳しい事はまだ何も分かっているはいないらしく、先程の報告にある程度の事しか書かれていない。

しかし、このまま放って置いて良い話でも無い。

少なくともクレイやその下で働く準高度AIを備えた個体とは違う、単純な思考回路しか持たないバイオロイドだけで構成された部隊が対応できる状況だとは思えなかった。

私は付近の探索を行っている部隊に集合の指示を出す。程無くして近い場所に設けられた簡易陣地へ向けて地図に表示された光点が移動を始めた。

そんな行動を執る私に、クレイは焦った声で制止を促した。

『マスター、敵性存在の可能性があります。残存部隊に警護を任せ、速やかな帰還を提案します』

「提案は却下させて貰う」

『マスター!』

断られるとは思っていなかったのか、驚いた表情を浮かべたクレイが声を上げる。今までに見た事の無い、感情を露にした表情だった。

「仮に敵性存在だった場合、現場で迅速に判断する者がいない状態では心許ない。なに、仮にも上級船員教育は受けているんだ……それに、君が付けてくれた護衛もいる。万一の時は頼りにさせてもらうし、通信だって繋がってる。……大丈夫だよ、クレイ。大事は無いさ」

後ろの護衛を指し示し、私は笑みを浮かべながら語りかける。

『しかし……いえ、わかりました』

なおも食い下がろうと声を上げたクレイだったが、私の表情から、その決意が固い事を悟ったのだらう。思い直したように瞳を閉じ、やがて力無く答えを返す。

『帰りの便は待機させておきます。どうかご無事で』

「ありがとう。すぐに戻るよ」

無事を祈るクレイの声に、静かに笑いかけた私は、通信を切った。

「待たせたな。まずは部隊と合流する」

クレイとの通信を終えた私は、後ろに佇む護衛の男に声を掛けた。私の言葉に敬礼を持って答えた男は、まるでついて来いと言っかの様に、声を上げる事も無く歩き出す。

後ろに続く私を気に掛けながら、油断なく周囲に気を配って歩く男は、平坦な道を選び、邪魔な草木を除去しながら進む。指定した場所は同じエリアの中ではあったが、一口にエリアと言ってもその範囲は広い。合流地点までは少し歩かなければならないだらう。私の疲労にまで気を使い、道を作りながら歩く男の後ろ姿が頼もしかった。

.....

.....

.....

.....

「いちいちです」

森に分け入った私達を出迎えたのは、拠点の警備をしていた男の一人だった。

その後しばらく歩き続けた私達は、森林地帯に構築された防衛拠点へと辿りつく。そこは広場に接近する者を監視する為に構築された拠点の一つだった。大岩を背にし、人が隠れる溝が縦横に張り巡らされただけの、拠点とも呼べない小さな野戦陣地ではあったが、召集命令を受けて集まった各小隊の探査機によって、その姿は一変していた。

小さく足を折りたたんだ探査機が中央に並び、蔦や葉で作られた網の様な物で擬装を施されている。

張り巡らされた塹壕を進んで到達する中央広場は、身の丈を優に超える擬装された探査機が安全地帯を作り出しており、唯一の出入り口となる塹壕の階段には機銃を据え付けた簡易的なトーチカが向けられていた。

ただの塹壕が掘られた簡素な索敵拠点だったそこは、横たわる探査機の壁によって侵入経路を限定し、戦力を集中して防衛する事を目的とした中々に堅牢な拠点となっていた。

そんな拠点の中央に腰を降ろした探査機の内部に、仮設指揮所は設けられていた。

私が近づくと、携帯端末から小さな光が漏れ、小さな電子音と共に扉を包むオレンジの光が青に変わる。扉を支えるシリンダーが駆動を始め、割れる様に開いた扉が私達を迎え入れる。

指揮所へと足を踏み入れた私は、敬礼で迎える部下達に答礼を返して椅子に腰を降ろす。

「今の状況は？」

形式的な指揮官引き継ぎ事項を口にする男の言葉を遮る様に声を上げる。人間相手ならば心象を悪くしてしまうであろう私の言葉を、疎ましく扱う存在はここには居なかった。私達は、形式的なやり取りもそこそこに、本題へと入った。

「生体反応の進路変更は認められず。依然北上中。反応個体数36、小隊規模です」

私の問いかけに、司令部要員の一人が答えた。

生体反応の発見と言う報告を受けてから既に一時間が経過している。投影モニターに表示された地図の上では、川に沿ってゆっくりと動く一つのポイントが表示されていた。その周辺には、味方を示す複数のポイントもある。着かず離れずの距離を保ったまま、生体反応を囲むように配置されているのだ。

私は端末を操作してディスプレイを表示させる。正体不明の存在を囲む索敵分隊から送られてくるリアルタイム映像だった。

どうやら索敵分隊は川から程近い木々の隙間に潜み、様子を窺っている様だ。映像の縮尺が時折変動するのは、ヘルメットの望遠機能を使っているからだろ。そうでないのであれば至近距離から撮影している事になる。

映像には、一つの集団が映し出されていた。

女や手を引かれる子供が歩き、そんな彼女たちを守る様に男達を取り囲んでいる。油断なく周囲に視線を向けながら歩く男達は、全員ががっしりとした無駄の無い身体つきをしていた。赤褐色の肌に黒い紋様を描き、銀の髪を首後ろで一括りにした男達は、それぞれが手に獲物を持っている。

統一されてはいない。歪に鍛えられた剣や槍、粗く削られた棍棒を持つ者、河原の石を拾い、革で出来た袋に詰めている者も居る。

私は知らぬ間に腰を浮かせて映像を見つめていた。

「惑星由来の人型知性体……？」

その様子を映像越しに見た私は、ゆっくりと椅子に腰を降ろす。未だに目の前の光景を受け入れられていない。

夜空に瞬く幾億もの星々の中に在って、人類の介入なしで生命体が存在できる環境を持つ惑星は少ない。人間と同等の知性を有する生命体に限っては人類が知る宇宙の中において皆無であった。それは、如何に我々が進化と言う積み重ねの中で、偶然発現した存在であるかを教えてくれている。

しかし、目の前の光景はどうだろうか。映像の中には、川に入って水を掛け合う子供達の姿があった。救い上げられた飛沫が恒星の光を反射してキラキラと輝いている。そんな子供達の様子を大人達は穏やかな表情で見つめ、護衛であろう男達もまたその輪の中に加わっている。その心温まる情景は、遙か昔に失われた出来事を伝える記録映画の一片の様であり、そこが未開の惑星の上である事を私

に失念させるには十分な物であった。

——それからしばらくの間、水を差す事も躊躇われる様な光景を見つめていた私は、部下達にその場を離れる様に指示を出そうとした。これ以上、あの暖かな雰囲気正視する事ができなかったからだ。

それに、例え広場が見つかり相見える事になったとしても、彼らならば問題は無い様にも思えた事もその考えを後押ししていた。

しかし、そんな私の行動は一人の司令部要員の告げる言葉によって中断された。

「状況の変化を確認」

彼の指さした投影モニターの先には、いつから居たのか、一人の姿があった。

自然の光で溢れる森の中に在って、人工的な臭いを放つ黒い装甲服で覆われた姿は、不自然なまでに浮き上がって見えている。

私は、拡大され、次第に鮮明になって行く姿に心を凍らせた。

——それは、私達の船、クレイドル号を襲撃した者達と同じ姿だった。

「ッ！ 気づかれない様に注意しろ」

私は咄嗟に通信端末に向けて声を上げると、鋭い視線を映像へと向ける。

映像の向こう側では、幸福な時間は既に終わり、一触即発の険悪な雰囲気漂っていた。

.....

.....

.....

.....

周囲を森に囲まれ、木漏れ日の優しい光が降り注ぐ穏やかな川辺は、静けさに包まれていた。虫の声や鳥の鳴き声が止み、風と川の流れる音だけが、そこに在る。

そんな光景を作り出している存在があった。それは雄大な自然の中に、一滴の墨を落としたかの様な、強烈な違和感を放っていた。

その存在は全身を黒い装甲服で覆っていた。一切の露出を許さぬ武骨な装束をまとった姿からは、感情の一欠片すら読み取る事はできない。分厚い装甲服の武骨なシルエツトが内側に居る者の存在を覆い隠している。

先程まで周囲に響いていた笑い声は途絶え、心温まる光景は過去の物となっていた。

女性達が子供を庇う様に抱き寄せて下がり、雄々しい姿の男達が前に出る。手には其々が武器を構え、一片の隙すらも見逃さない様に鋭い視線を黒服に向けていた。

——始まりは唐突だった。

一行の前に現れたまま、一切の動きを見せなかった黒服が足を踏み出したのだ。周囲には砂利を踏みしめる静かな音が響く。

無言の圧力を受けてか、武器を構えたままの男達があとずさる。気を取り直して武器を握り直す彼らの手には、玉のような汗が浮かんでいた。

一步、また一步と一行に近付く黒服。迎え撃とうとする男達の顔には、困惑と焦燥が貼りついていていた。

「ぐ、ぐうつうおおおおおおおお！！！」

やがてそんな重圧に耐えきれなかったのか、一人の男が聞く者を竦ませる様な叫び声を上げながら、躍り掛かった。手に握られた歪な形の剣が、木漏れ日を反射してチカチカと瞬いている。

鍛え抜かれた体の見せる瞬発力が彼我の距離を一息に縮めた。

黒服が男の動きに目を向けた時には、既にその存在は、男の間合に在った。高々と振り上げられた長剣が、唸りを上げて襲いかかる。

未だ黒服に動きは無い。勝利を確信した男は、凄みのある笑みを浮かべた。

静けさに包まれた広場に甲高い音が鳴り響く。それは、切られた者が放つ断末魔でも、避けられた剣が空を切る音でも無い。キーン、と言う金属質な反響音であった。

男の笑みは困惑に変わりやがて驚愕となった。

男が渾身の力を込めて振り下ろした剣は、半ばから砕け散って、鈍い光を放つ破片となったのだ。

——刹那、一際大きな塊が川へ落ちて水しぶきを上げる。

剣を取り落とした男は膝をつき、手を押さえてうずくまる。渾身の力を跳ね返されたのだ、無理も無い事であった。

そんな男の首筋に、黒い棒の様な物が押し付けられた。

そのひんやりとした感触に、男が視線を向けようと体を起こした次の瞬間。それは起こった。

「ぐ、がああああ！！？」

短くも鋭い叫びが周囲に木霊し、その声に驚いた鳥達が一斉に飛び立った。全身を痙攣させた男がゆっくりと倒れて行く。投げ出された体は川に沈み、水しぶきが黒い装甲服を濡らす。

男を下した黒服は、再び視線を元に戻し、ゆっくりと歩き出した。今まさに死闘を演じた男に視線すら向けない態度は、今の戦いについて、何の感慨も懷いていない様に見える。

武器を構えた男達は喉を鳴らした。

折からの緊張と、先程見せられた圧倒的な実力を前にして、表情には怖気が見えている。相手はただの一人だと言っのにも関わらず。

しかし、ただ一人だけ戦意をたぎらせる者がいた。先頭に立つ者の肩を掴み、押しのけるようにしてその男は前に出た。厳つい顔に、

しなやかな身体つきをした長身の男性であつた。

だらんと垂らされた腕には長い槍が握られている。先端が鋭く削られて大きな刃となつた特徴的な槍は、男の手と共に上下に揺れ動き、安定しないその動きは見る者に不安を懷かせる。

一際大きな石が鎮座する川中へと進み出た男はそこで動きを止めた。ぶらぶらと揺れていた槍の穂先は黒服に向けられて微動だにしない。かなりの重量があるであろう長槍を、ぶれる事無く持ち続けられるその技量は、近接武器が用いられる機会の失われつつある時代の感覚では計り知れない意味を持つ。

瞳を閉じた男が、構えを解いた。

薄く鋭い目を開け、歩み続ける黒服を睨んだ男は、腕を振り上げると鎮座した石に向けて、槍の石突きを裂帛の気合と共に叩きつけた。

——次の瞬間に轟いたのは爆音だつた。

大きな音と振動によって生じた衝撃が瓦礫を周囲へと巻き上げ、川の水は空を舞って辺り一面に降り注ぐ。

黒服がその光景に気を取られている隙に、男は動き出していた。一際大きな瓦礫を目眩ましに黒服の死角へと回り込んだのだ。

男の姿を見失つた黒服が迫りくる圧迫感に気づき、咄嗟に回避行動に移ろうとした時には、既に男の槍は唸りを上げ、黒服の腹部へと吸い込まれていた。

一際大きな音が響き、弾き飛ばされた黒服が川辺を跳ねながら飛んで行く。しかし黒服は、その勢いに乗る様に大きく宙を舞い、砂利を巻き上げながら姿勢を立てなおした。着込んだ装甲服が衝撃を吸収したのだろう。両手を地に付けて屈んではいるが、先程の攻撃によって黒服が傷を負った様子は見えない。

弾き飛ばされた黒服の姿に、どよめきにも似た歓声が上がる。男の攻撃が簡単に入った事で、そこまでの相手では無いと考えたのかもしれない。彼らの顔から得体の知れない者に対する恐怖は薄れ、明るい感情が現れる。

そんな彼らを見捨てる様にゆらりと黒服が立ち上がった。

その姿には好敵手に対する賞賛も、弾き飛ばされた事に対する憤りを示す姿勢も無い。ただ膝をついたから立ち上がった。それ以外には何も無かった。

立ち上がった黒服の姿に、武器を構えた男達が走り出す。本来の自分たちの役目が何であったのかを、ようやく思い出したと言ったところだろう。砂利を踏みしめ、次々と川の中に佇む敵目掛けて距離を詰めて行く。

先程黒服に攻撃を仕掛けた男もまた、そんな彼らの様子を小さく笑うと戦列へ加わった。弾き飛ばされて距離の開いた黒服を確実に屠る為、男達は手に持つ武器を掲げ、喊声と共に水飛沫を上げながら川の中を突き進む。

対する黒服の動作は、緩慢な物だった。

確実に、素早く距離を詰めてくる男達の姿を一瞥したかと思うと、

手に持った棒の様な物を流れる川に浸し、再び男達に視線を向けたのだ。

討ち掛かつて来る男達を、微動だにせず見つめる姿は笑っている様に見えた。

そんな黒服の様子に目聡く気づく者――槍を持った男など――も居た。しかし、それは遅きに失する事になる。

彼らが警戒を促すよりも先に、断末魔が周囲を満たした。悲鳴や叫びと共に、川中に踊り込んだ者達が次々と倒れて行く。川から離れる事が出来た者も、体から煙を上げながらのた打ち回り、やがて動かなくなつた。

先程まで聞こえていた喊声は消え去り、森の持つ音が戻ってきた。川の流れる音は以前と同じように、木々のざわめきもまた同様に。

運よく川に飛び込む寸前だった槍の男と数名の戦士達は茫然とした表情で目の前を眺めていた。名立たる戦士である彼らの仲間が一瞬して散って行ったのだ。それも当然と言える。

未だに黒服は自分達から視線をそらしていない。正氣に戻った彼らは、素早くその場を離れた。先程の攻撃を恐れたのだろう。

逃げ戻った先には未だに身を寄せ合う女達が居た。目の前の光景が信じられず、その光景を作り出した存在が恐ろしいのか、愚図る子供を抱きかかえ、震えて蹲っている。

男達は切羽詰まった声を上げて女達を追い立てる。声に促された彼女達もまた、震える足で立ち上がると、おぼつかない足取りで逃

げ始めた。

その姿に安堵の表情を浮かべた男達は、武器を構えて黒服と対峙する。

少しでも彼女達が遠くまで逃げられる様に。そして、散って行った戦士達に報いる為に。彼らは、黒い装甲服の男の前に立ちはだかる。

悲壮な覚悟を固めた男達を包む、自然の奏でる穏やかな音色。

周りで何が起ころうとも、その音だけは変わる事無く響き続けた。いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5667r/>

遙か彼方の時代より【改訂版】

2011年10月19日11時13分発行